第 9 巻

成寿

SEIJU

1988 春号

横浜 善光寺刊

謹啓　まつやく春めいて参りました
皆様益々御健勝のことと存じます
遠藤　茅舎をお送りいたします
今年は当寺開創二十年を迎える
年であります　さいわいお檀家の
皆様方の理解ある協力をいただき
真に有意義な記念事業を推進
し乗方面から絶讃を博しております
誠に過ぎし日お詫申しあげます
書画は茅舎ちがいの
法華経書写であります　合掌

昭和六十二年二月吉日

[illegible]寺住職　馬田大圓
（武志）

檀徒の皆様

諸の悪を作さず
諸の善を行い
自らの心を浄めること
これが諸仏の教えである

「法句経」

第 9 巻

成寿

SEIJU

1988 春号

三苑庵

檀徒皆さまのご協力の賜物

山主　黒田大園

「善光寺海外留学僧派遣育英会」設立以来満四年を閲しました。この間、仏天のご加護により派遣事業は順調に進展し、昭和六十年を第一期として、四期通算十三名の方々を派遣しております。さいわいにしてこの事業はいまや国際舞台に進出する機会を与えられることとなり、旧臘八日、釈尊成道の佳き日、パリー、第一大学で開かれた日仏セミナーにおいて、「新しい教化路線を求めて――十五年の軌跡とその成果――」と題して、一時間半、文字通り熱弁をふるってまいりました。そしてその草稿のほぼ全文が「中外日報」に掲載され、その後上智大学の安斎教授が「理想具現の実例に学ぶ」と題して同誌に讃辞を

寄せてくれました。この一事を以ってしても、当寺の運営は大きな評価を受けているのであって、これひとえに檀徒各位の理解あるご協力の賜物であり、感謝にたえないところであります。この点につき私が、「この難行を実行するにあたり、私は檀家の方々に、心からおすがりしてお願いをいたしました。ご飯を一食毎に一口だけ減らしてください。それで仏法をひろめたい……と。私は〝法輪転ずるところ、食輪自ら転ぜられる〟ことを確信しております。これが仏天の御加護ならば、まさしく援助してくださる檀徒の方々は仏そのものであります。

「檀家を敬うこと仏のごとくすべし」

という瑩山禅師の教えを、ひたすら実践することが、現在の善光寺を形づくり、海外留学僧派遣という一大事業を可能ならしめたと思います」

と述べた時檀家の方々の浄行を讃える拍手が湧き上がりました。

法句経

巻頭言　黒田　武志　4

■衿羯羅・制吒迦二童子……2

■第二回日仏セミナーで発表……6

カラー■詩……12

■二童子開眼法要……14

特別寄稿■日仏セミナー「仏教とアジア社会」に参加して　……奈良　康明　18

■日仏セミナー「新しい教化路線を求めて」　……黒田武志(大圓)　24

■日仏セミナー「仏教とアジア社会」会議報告　……坪井　善明　46

法　話■お不動さまの話……佐藤　俊明　52

講　演■仏との出逢い……錦戸　新観　68

エッセイ■禅と衣食住（四）……お斎……東　隆真　74

留学記■プーナで出会った人たち……阿部　慈園　82

日本入のインド理解の育点……保坂　俊司　86

視野を広める海外生活……島崎　義孝　92

善光寺だより……98

読者からの便り……99

PREFACE……104

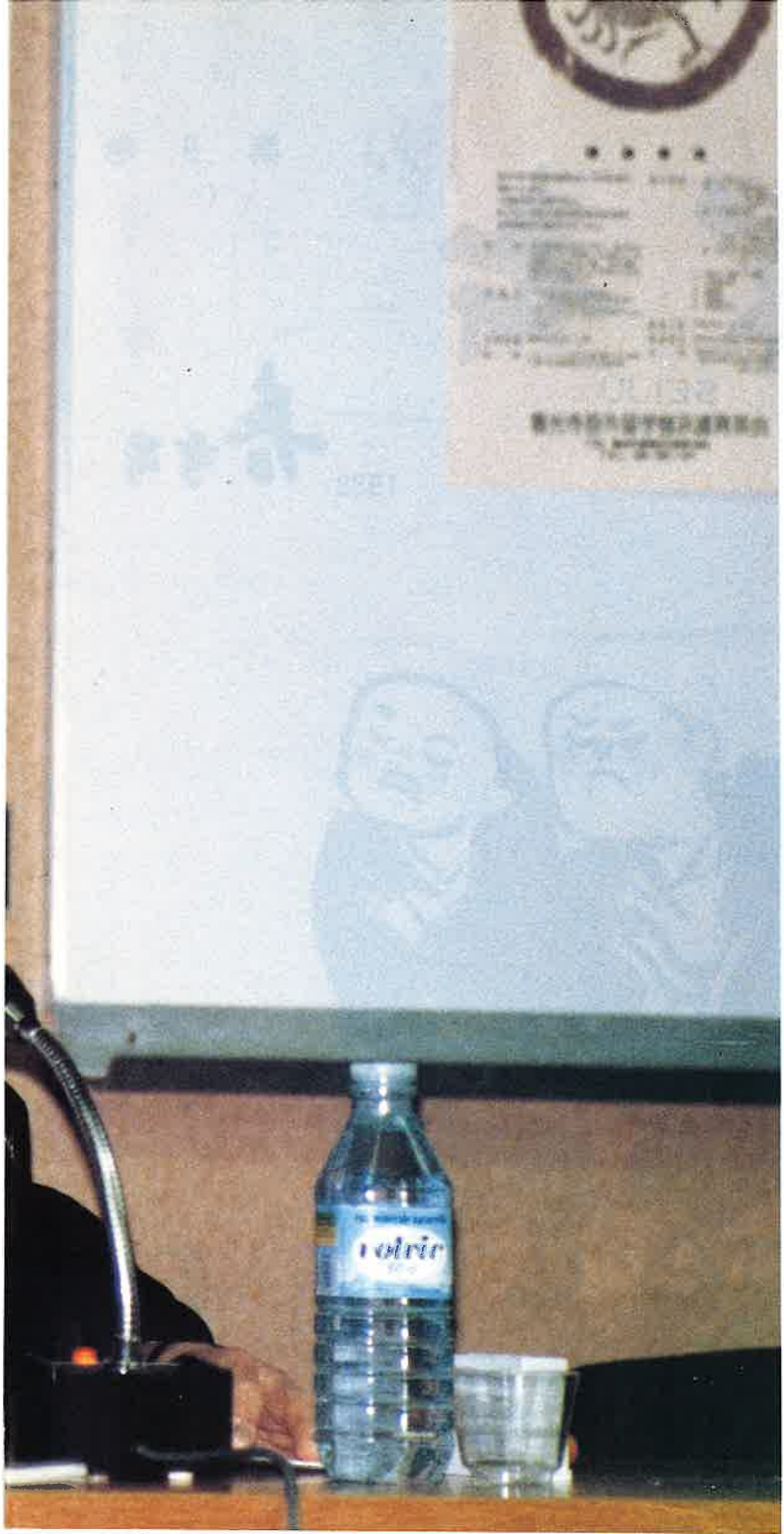
題字・グラビア・さし絵　伊藤三喜庵

グラビア撮影　五十嵐千彦

カット　古刷仏集より

〔フランス・パリ〕

第二回 日仏セミナーで発表



パリ第一大学にて

パリの街は美術館

ピェール・ヴェルナール・ラファン教授、ベルナール・ランク教授

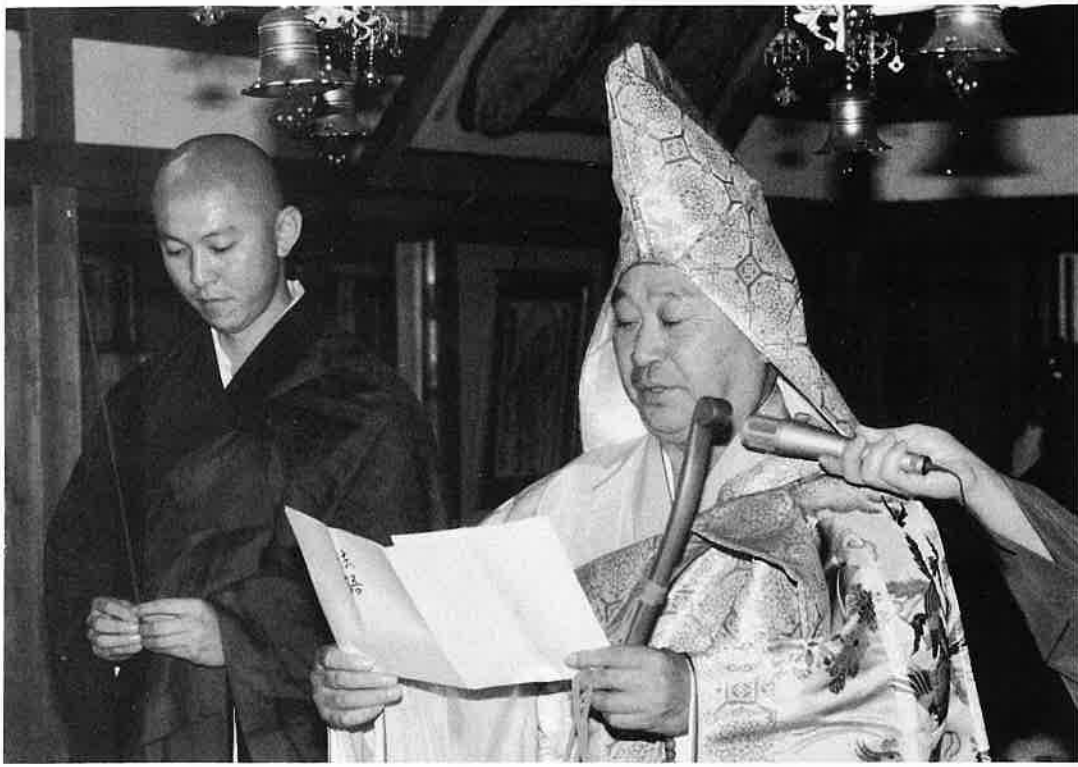
衿羯羅童子

制吒迦童子（善光寺蔵・六十二年十一月開眼法要）

衿羯羅・制吒迦二童子
開眼法要

昭和六十二年十一月二十八日

不動明王図・伊藤三喜庵筆



導師は本寺光真寺住職・黒田俊雄老師

矜羯羅・制吒迦　二童子開眼法要

十一月二十八日、不動明王の眷属である矜羯羅・制吒迦の二童子の完成にともない、開眼法要が厳修されました。

製作者であられる、大仏師錦戸新観先生のご臨席を賜わり、導師は、本寺光真寺住職・黒田俊雄老師が務められました。

念願の二童子の勧請により、今までも皆さまに親しまれてまいりました〝身替わり不動明王〟が、更に霊験あらたかなご本尊として、これからも一層、皆さまをお守りくださることでありましょう。

不動明王の本体である大日如来も、現在着々と制作がすすめられております。

大誓願は天心に在り

赤間　義徳

遠く終電車が通過していった
人声も足音も消えた
バスもトラックもタクシーも通らない
ふたたび　夜の静寂がもどった

充実した沈黙の中から
一匹の虫の生命の音が　よみがえる
草花や樹木を流れる生命の音が　よみがえる
星たちや死者たちのささやきが　よみがえる

騒音が隠していた
尊い生命の音が　言葉が　光ってくる

世界に向かって仏法を説く
黒田大円方丈様の
お言葉が　胸に響き泌み通ってくる。
毀誉褒貶を超え　宗派を超えて
海外留学僧派遣の
大誓願が　銀河系宇宙の天心に澄みわたる
〃見る人の心ごころにまかせおきて
高嶺に澄める秋の夜の月〃（古歌）

●特別寄稿

日佛セミナー「仏教とアジア社会」に参加して

奈良康明（駒沢大学教授）

一、

かって、「夏は暑い」というテーマでどこかに書いたことがある。

暑い時、我々はその暑さにどう対処するのだろうか、ここには二つの方向があって、まづ、暑さをなくしてしまえ、という考え方がある、暑さがなくなり、あるいは軽減されれば、暑さの苦は「解消」するから、この考え方は大変に有効である。クーラーを利用するというのはその典型的な例である。

しかし、野原ではクーラーはきかないし、都

会でも停電したら役にはたたない。クーラーは万能でもなく、何時でも使えるわけではない。そこで二番目に、我々の心を暑さに対抗出来るものとしよう、という方法がでてくる。

では、どうやって？というと、ここに「夏は暑い」という受け取りかたが意味を持ってくる。

暑さという苦が、現実のものとして、今、私におそいかかっている。クーラーもきかない。あの時こうしていれば、こんなに暑い所を歩くような羽目にはならなかったろうに、とボヤクのは無意味である。過去は過去で過ぎ去ってしまったのだから、今更どうしようもない。また、こういうシステムにすれば、暑いさなかに歩かなくてすむのに、というのは未来への夢である。未来は未来であって、今の現実ではない。

結局、自分が否応なしに置かれている現状を、嫌なことだろうと何だろうと、はっきりと明らかに自覚し、「夏だもの、暑いのは当り前」と開きなおってしまう。ここに、かえって、出てくる汗を拭き、拭き、それでも目だけは前を見つめて、胸をはって歩きつづける内心の強さがでてくる、こうしてこそ、暑さは一時的に「解決」されるのではなく、「解消」される道がひらける。

暑さとは人生の暑さのことだが、釈尊の教えた仏教とは、基本的にはこの「解決」の姿勢をもちつづけ、そしてそれができるための不断の訓練、生きることの訓練、すなわち信仰の生活を心掛けよう、というものだと、私は思っている。

ただ、ここが重要なことだと思うのだが、仏教は自分の心と対面し、心の内部にとじこもるだけではない、私たちはそれぞれの社会に生きていて、そこの歴史的な考え方や慣行、習慣、制度の枠の中にいる。私たちは社会的存在なのである。（社会的存在だけ、ではないけれども。）

自分の現実の状況を「あきらかに」「あるがままに」みて、開きなおって生きる、ということは、必ずや、その人の生きている社会と密接にかかわっている。社会という脈絡の中で、信仰者としてどう生きるのか、ということが何時も問われているし、それなりの社会への発言や働きかけにも連なってくる。ここに仏教徒が政治や経済、社会の動向、医学や科学の社会的意味などとかかわってくる。

また、上にのべた言葉を使うなら、自分の苦を「解決」する教えと実践を中心に教団が成立すると、ここでも教団と社会との関わりがでてくる。つまり、私たちの社会生活は祖先崇拝や葬式、結婚式等の通過儀礼、また祈願儀礼などの民間信仰的な文化の上に成り立っている。だから仏教教団はどうしてもこうした民間信仰をとりあげ、いろいろな形で仏教化し、自分のものとしないと、教団自体が社会に定着しないのである。

さて、仏教はインドから東南アジア、中国、韓国、日本などのアジア社会にひろがり、今日まで伝えられてきた。この事実は、上に述べたように、仏教がそれぞれの社会の政治、経済、社会、文化などと密接にかかわってきた形跡を示している。

二、

こんなことを、今更、言い出したのには実はそれなりの理由があるので、いままでの仏教研究というのは、「解決」レヴェルの教理、教学の研究のみが主流になっていた。政治、経済などとの関連では殆ど論じられることがなかった。もしあるとすれば、歴史学の立場から仏教教団の動きがとりあげられるぐらいで、仏教学とは関係がなかった。また仏教徒が行っている民間信仰などの伝統的な宗教文化は民族学や民俗学のみで研究され、それも仏教教理との関係は全

聖母像

く顧みられなかった。一方、仏教学者の方もこうした問題にはいっさい関心を示すことがなかった。仏教というもの、もう少し正確にいうと仏教文化、は「解決」のレヴェルを本義とし、その意味では個人的な心の世界を基本に眺めつつも、各時代の社会と深く深くかかわっている。それなのに、いままでの仏教研究は、人間の身体にたとえていうなら、各部分をバラバラにして、互いに無関係に研究してきたのである。その意味では、今の医学と似ているといっても良い。

しかし、それでは困るのであって、仏教は仏教文化という全体からみて、その上で、各分野がそれなりに位置づけられ、相互の関連の上で理解されるのが本当だろう。こうした反省が私の属する分野でも出ている。医学界でも同様の傾向が強くなっているという。やはり、そういう時代なのであろう。

その意味で今回のセミナールは画期的なものといっても良い、坪井先生の報告にもあるとおり、出席者の専門領域は様々である。一致しているのは皆、アジアの研究者だと言うことくらいである。その人たちが一堂に会して「仏教とアジア社会」を論じたことは、仏教という文化体系を全体的に、かつ総合的に、研究する新しい動きの先駆けともいうべき試みでもあったのである。

三、

それだけに、それぞれの発表は私には大変に面白かった。ヴァンデルメルシュ先生と加藤栄一先生の発表は中国と日本と舞台を異にしながらも、仏教と政治権力の関係を論じ、特に、後者は仏教教団と政治権力が互いに利用しあい、車の両輪のような関係にあったとする。これは西欧のタテ系列で覇権を争ったのとは対照的な構造である。フランク先生は帝釈天(インドラ)

というインドの神がいかに仏教にはいり、中国、日本の各地でそれぞれに変容しながら、仏教文化の一面として定着してきた歴史を見事に跡づけた。矢沢先生は中国におけるキリスト教と民衆宗教との関わりを論じ、ティリ先生も文化人類学者のMスパイロの所説をも引きながら、タイにおいて仏教がどのような形で一般に受け入れられ、社会生活に機能しているかを論じた。ラファン先生とグエン・テ・アイン先生の発表はそれぞれラオスおよび南ヴェトナムにおいて、激動する東南アジア諸国において仏教が政治や社会変革の動きとどうかかわっているか、を論じたものである。考えてみれば、フランスはヴェトナムのかっての宗主国で、フランス、ヴェトナム両系統の方々の研究者も多く、関心の強いことは当然なのだが、日本から行った私には新鮮な刺激だった。そして、黒田師は善光寺の創設と発展、留学僧派遣事業を中心にしながら、現代に生きる仏教者の活動を生々しい感動でつづった。アジアの、ここでは無論日本の、社会に民衆が仏教に何を求め、仏教者がわがそれにどう対応しているか、は本セミナーの中心テーマで、黒田師の発表は特にフランス側の出席者を喜ばせた。

こうして見てくると、それぞれの発表論文はまことに多岐にわたっている。扱う国や時代もさることながら、研究の視座も方法もみな違う。これは仏教と社会というテーマから、当然そうなるはずなので、驚くにはあたらない。しかし、上にも述べたように、仏教がさまざまな方面からアプローチされる、ということが共通の意識としてあり、それらが同一の学会で提示され、等しく興味をもって議論されたところに、本セミナーの一つの大きな意義があると私は思う。各発表それぞれの質の高さもあり、有意義で、成功した学会であった。

第二回 日仏セミナーに於て発表…フランス・パリ第一大学

新しい教化路線を求めて

―15年の軌跡とその成果―

黒田武志

私は、日本の横浜・善光寺の住職黒田武志（大圓）です。

今回は、新しい教化の実際と、日本の社会、ひいては世界における仏教寺院の役割と檀家組織との関わりといったことを、かいつまんで申し上げたいと思います。

日本における仏教

日本の仏教は、およそ一、四〇〇年前、インドから中国大陸、朝鮮半島を経由して伝えられ

ました。日本の生活、文化に及ぼした仏教の影響力は決定的なものがあります。仏教を抜きにして日本を語ることはできません。

日本の仏教は大乗仏教の系統でありまして様々な宗派に分かれております。およそ七万五千の寺院、約十万人の僧侶、約数千万人の仏教徒の大部分は、天台宗、真言宗、浄土宗、浄土真宗、曹洞宗、臨済宗、日蓮宗、その他いずれかの宗派に属しており、そしてその宗派にはそれぞれの宗祖がおり、本山をピラミッドの頂点として全国各地に末寺があり、地域的に檀信徒と密接的な交流をはかり、布教活動につとめております。曹洞宗の場合は道元（鎌倉時代に中国から禅を持ち帰った曹洞宗開祖）、瑩山（鎌倉後期道元の開いた曹洞宗をひろく世に知らしめた高僧）両禅師、浄土真宗の場合には親鸞聖人といったようにです。

私の善光寺は、曹洞宗（日本最大の仏教教団。

坐禅を主とする禅宗）と申しまして、いわゆる禅宗の一派で、およそ一万五千カ寺の寺院数と二万人の僧侶と約七百万人の檀信徒を擁する日本最大の仏教教団であります。日本は仏教の盛んな国であるといわれております。確かに全国にはたくさんの寺院がありますが、そこでは日本民族固有の祖霊信仰と結びついた祖先崇拝の儀礼（亡くなった人は家族や子孫を常に守護してくれる霊として敬い、定められた年数毎に、その人の供養をする法事を行います）、が宗教活動の多くの部分を占めており、肝心の仏教の教義を学び理解し、仏教が果たさなければならない現代社会ないし世界平和への役割を実践している寺院は少数であります。

私の寺院経営の実際

さて、私は十八年前にゼロから新寺を建立し、現在では檀家（つまり特定の信者）数は二千六百軒を超えております。これは驚異的発展であるとされて、各方面から様々な取材を受け、新聞やテレビで報道されたり、発表する機会も数多くありました。ここで簡単にその経過をのべてみたいと思います。これだけの檀家数を短期間のうちに確保できたのにはそれなりの理由があります。それは死者を葬ることと、その後の供養（年回法事）を寺院経営の主たる柱とし、現に生きている人々の心にやすらぎを与える宗教本来の使命に欠けている現代の日本仏教ないし、寺院のあり方に疑問を感じ、その本来の使命と役割を発揮する為にはどうしたらよいかと模索しました。たとえば、まず周囲の人々の心を捉えることが先決と考え、子供たちを寺に親しませようと、日曜学校を開き、ボーイスカウト運動の育成に力を致し、また少林寺拳法の練習にはげむ少年たちの坐禅指導をしたり、瑩山禅師の教えの通り、檀家を敬うこと仏のごとく

相対した。こうした努力の積み重ねと多くの方々が共鳴して支持して下さった結果にほかなりません。これは寺院の事業を行う際の大きな推進力となります。

新寺建立から現在までの主な経果

1、一九六一年、林和尚が私の師父、黒田白純大和尚の勧めにより、善光寺の現在地に小庵を建てたが、志半ばにして一九六八年この世を去った。

2、①その翌年の一九六九年、アメリカでの修行を終えて帰国した私はこの話を聞き、すでに人手に渡っていたこの小庵を六百万円（一六、七〇〇ドル）で譲り受けた。もちろん借金である。この小庵は横浜市営日野公園墓地の正門脇にあり、将来有望だと判断したからである。

②同年十一月、宗教法人「善光寺」の認証を得、大阪の成寿堂本舗ナリス化粧品（現在の株式会社ナリス化粧品）社長村岡満義氏を開基（寺の開創の基礎を造ってくれた人）、師父、黒田白純大和尚を開山（寺の開創者）として勧請し発足した。村岡氏との関係についてはあとで述べる。

3、①一九七〇年一月八日、本殿及び客殿一二〇㎡を建立した。工費は三五〇万円（一万ドル）、併せて土地五四一㎡を購入した。一六四〇万円（四五、五〇〇ドル）。資金は村岡氏及び同会社社員一同よりの喜捨一千万円（二七、八〇〇ドル）を投入し、残金は翌七一年に完済した。

4、①一九七二年七月、本堂及び客殿二四八㎡の増築に着手し、十一月に竣工した。工費一、八〇〇万円（五〇、〇〇〇ドル）。

②檀家数（特定の固定した信者）四六〇世帯に達したので、五ケ年計画を樹立し檀徒数一千世帯確保を目指し各種行事の展開を

はじめた。

5、①一九八〇年、目標をはるかに突破して檀家数一六〇〇を超える。

②かねて念願の釈迦殿建立の構想を発表し、翌八十一年五月着工。八十二年十月竣工する。総工費、土地取得費を含めて三億七千万円（一五〇万ドル）。

③旧館の増築に五千万円（二〇〇、〇〇〇ドル）を投じ、八十三年工事完了。

6、一九八三年、開創十五周年記念式典を挙行する。檀徒数二千世帯となる。

7、一九八四年、善光寺海外留学僧派遣育英会を設立する。現在第三次の留学僧を海外に送っている。

（注：円・ドル共、当時の資料に基づく。）

以上が、全くのゼロから出発して現在に至る軌跡でありますが、これを可能にしたと思われる要素は何であるかというと、立地条件に着眼

パリ第一大学前にて

したことです。立地条件とは、墓碑二万基を擁する壮大な横浜市営日野公園墓地の門前にあるということであります。そしてこれら墓地所有者の三十パーセントは所属する寺院を持たないという現実がありました。それに加えて、横浜は長崎、神戸、函館と並ぶ日本の代表的な港であり、国際都市であります。私はこの立地条件を生かして、修行の場として、布教の拠点として、さらには檀信徒の研修センターとして仏教の国際的使命を果たす拠点として理想的な寺院を創ろうと決意したのです。そしてこれを支えるものは誠意をもってひたむきに事にあたる実践と信念のみであります。誠心誠意つとめることによって周辺の多くの方々から有形、無形の協力を得ることができ、檀家との交流を密接にしたために地域の人々から口コミでどんどん拡がっていきました。

もともとお金はありませんでしたから全部借金です。しかし借金は日々返していけばいい。私のお金だと思えば出したくもなくなるかも知れませんが、私のお金ではありません。檀信徒の方々から預ったお金ですから、仏法の為に用いて檀家に還元するのは当然の理であります。お葬式や法事など、日常を支える厳粛な儀式をリードすることでもあり、まずその意味を説くことからはじまります。お通夜には生死について説き、葬儀に当っては曹洞宗の法式に従って「剃髪」(頭髪をそりおとすこと)により煩悩を除き、懺悔(ざんげ)によって心を浄め、三宝帰依によって心を定め、戒律を守ることによって生活の純化をはかる「受戒(じゅかい)」の意味を教え、肉親の死に揺れ動く遺族の気持を安心(あんじん)に導く。単に儀式を司るだけではなんの為の葬儀かわかりません。ひとつひとつの儀式の意味を説きながら死者を仏弟子として成仏に導くと共に、「安心」を与えることが最も大切なことであります。死者を仏

弟子としてみ仏のもとに送る心のやすらぎを得てはじめて檀徒の方々は「寺」と「僧」に対する認識と信頼を新たにするのであります。しかし、「死」に関わる葬儀や法事だけでは、本当に寺院としての役割を果たしたことにはなりません。

私は、理想的な寺院、布教の場として檀信徒の研修センターとしてそれまで縁のなかった若い人々が、お寺に対する認識を新たにしてほしいとの願いから、その第一歩として、子供たち対象の日曜学校からはじめました。はじめのうちは思うように集まりませんでしたが、しかしたとえひとりでも、誰もこなくても、必らず継続してまいりました（たとえば紙芝居、仏教の聖歌）。お寺へ引き寄せる為には多彩な行事を繰り返し続けなければなりません。この日曜学校を手はじめに、数々の行事を設けました。

現在、定例になっている諸行事を次に挙げてみます。

1　週間の行事

○写経会　毎月第二土曜日
○参禅会（一般の部）毎月第二日曜日
○茶道教室　毎月第一・第三月曜日
○少林寺拳法参禅法話会　毎月第一・第三木曜日
○書道教室　毎月第二・第四土曜日
仏典研究会・その他を継続している

2　年間の行事

○新年祈禱会　一月十日
○節分会　二月三日
○開山忌　二月七日
○青年会総会　二月二十一日
○春彼岸法会　三月十九日
○花まつり法会　四月八日
（婦人会総会）
○婦人会研修会　五月十日

○不動明王大祭　五月二十八日
（大般若法会）
○大施餓鬼法会　七月九日～十日
○棚経（お盆供養）　七月十三日より
○本寺光真寺参拝　七月二十三日（一泊）
○医事・身上相談　九月十五日
○秋彼岸法会　九月二十一日
○七五三祈禱会　十一月十五日
○お茶会　十一月二十五日
○成道会　十二月八日
○『成寿』（善光寺機関誌）発行　年三回発行（不定期）

これらの行事に於ても必らず法話を行い、福引きやバザー、あるいは芸能人を呼んでの清興を催すことなどもします。これは寺に親しんでもらい、寺を檀信徒および檀信徒相互の心のふれあいを深める場とするための手段であります。寺は決して人間の死のみに関わるだけの場

セミナー風景

所ではないこと、喜怒哀楽すべての心のその折り折りに関わることのできる開かれた場所だという認識が必要であります。

その他不定期にボーイスカウトや会社、団体、大学生などへの講演があります。

諸行事を行っておりますとまさにフル回転であります。しかも、学ぶのが檀徒なら、指導する者もまた檀徒です。これだけ多数の檀徒がいれば、あらゆる分野の専門家が揃うことになり、さまざまな職種での第一人者が寺のブレーンとなってくださるからこそ、こうした企画も実を結ぶのです。人との出逢いのありがたさを痛感したからこそ、のちに述べる人づくりこそが寺づくりであると思い至ったわけです。

人はひとりで生きているのではない。仏とそして有縁無縁の多くの人たちによって生かされているのであります。そのことに気づかせていただいたのは日本一周の行脚と世界各地を巡り歩いた修行によってでありました。以下、その経緯を簡単に申し上げましょう。

放浪の修行体験

私は八人兄弟（長兄夭折）の六男として生まれましたが、父は大変厳しい師匠でしたから、小さい時から法務を叩き込まれました。苦しい生活の中から駒沢大学の大学院人文科学研究科仏教学専攻修士課程を修了させてもらい、そのまま曹洞宗大本山総持寺（横浜市。瑩山禅師の創立）に修行のため上山し、十月にもうひとつの本山永平寺（福井県にあり、道元禅師の創立）に上山し修行しました。これは僧侶となるための一般的課程です。しかし私は、多くの僧侶が踏む一般的課程では満足できませんでした。伝統的、形式主義的な仏教的環境（形を尊ぶことに重きをおく修行）に身を置くうちに、いつの

間にか自分の奥深いところから湧き上ってくる仏教への疑問、教団や寺院への疑問、そして自らへのきびしい反省がありました。こうしたことをしているだけで良いのだろうか。私は果して僧侶として存在意義があるだろうか、と疑問と不安と焦燥に明け暮れました。

やがて私は悶々のうちに永平寺から下山しました。私は自分自身を寺院以外のところでとりなおしたいと決意したのです。もちろんその時、私の懐中にはわずかなお金しかありませんでした。身につけている衣一枚が全財産といってもよいのでした。手持ちの金ギリギリで切符を買い、東京へ帰ろうとしたのですが、プラットホームの両側に列車が入っており、発車のベルが鳴っていましたので走って跳び乗りました。ところがそれは、東京とは反対に行く列車だったのです。やむを得ないので富山という所で降りて後輩のいる寺をたずねて一夜の宿を借りました。ここで托鉢を勧められたことがきっかけで日本一周行脚がはじまったのです。富山は仏教のさかんな地方でありますから一日の托鉢で八〇〇円（約二ドル）ほどいただき、こんなに集まるなら能登の大本山総持寺の祖院まで行こうと決心したのが始まりでした。

行脚の途中、京都の郊外でのことです。雨の日が続いて、つい涅槃金（不慮の死に会った時の葬式料）を使い切ってしまうことがありました。木賃宿で残った二十円（五セント）を見つめながら、茶わん一杯の茶とコッペパンをかじり、人間の生命は何て安いもんだろうと思いました。翌日も雨です。

「今のオレに、一体何ができるんだろう。」と自問自答しました。

「そうだ、オレは坊さんだったんだ。お経をあげることが仕事ではないか！」

そう気がついて、宿の主人のところに行って

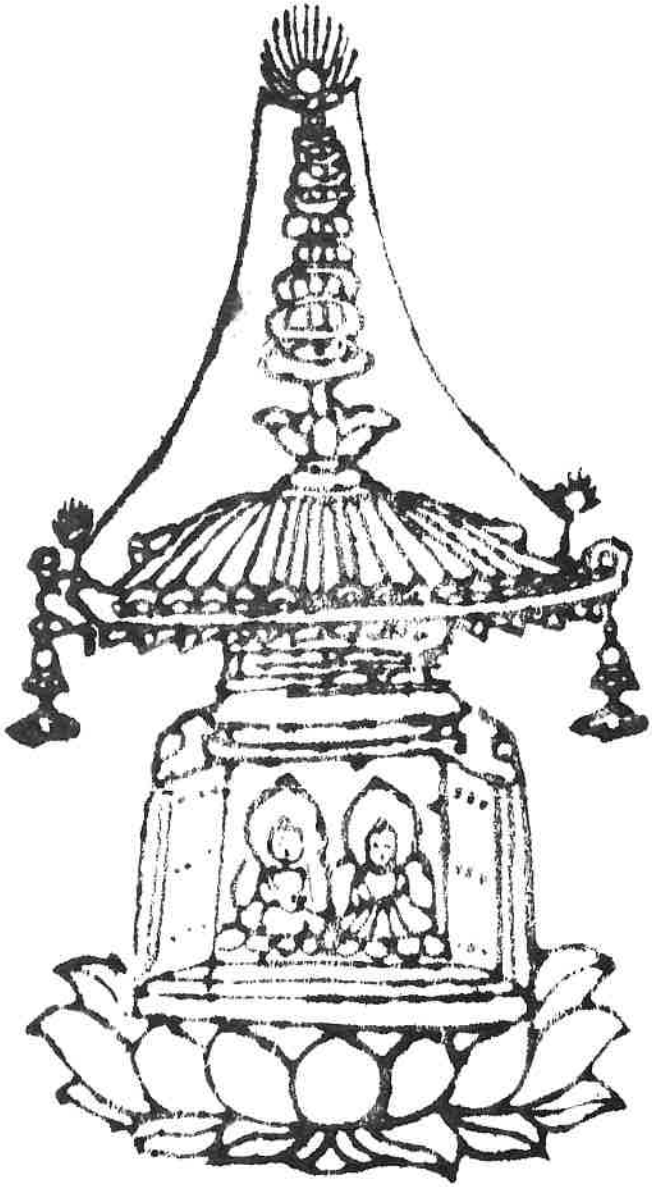
お経をあげさせて下さいと頼みました。衣は汚れ、雨に濡れていましたが、宿の主人は快くお経をあげさせてくださって、その上、あたたかな白いご飯を供養してくださいました。それ以上甘えるわけにはいかないと思って、ドシャ降りの雨の中に飛び出して行きました。しかし、誰も喜捨してくれる方はありません。午後になって、雨が止みはじめた頃学校帰りの女学生がたくさん現われたので、学生に向ってお経を唱えると、三円（一セント）五円（二セント）とみるみるうちに応量器（供養を受ける入れ物）にお金が入ってくる。その時でした。太陽がパアーッとさしたんです。

「ああ、私は生かされているんだ。人間は絶対に死なないんだ。」と、実に感動的に確信したのです。それが私の人生の基礎になりました。私はそうして救われてきましたから、何も動ずるものはありません。そうした苦境のなかで、女学生の三円（一セント）、五円（二セント）に救われたのです。このことは、生涯忘れ得ぬだろうと思います。

やがて日本一周を終え、総持寺の特別僧堂（宗門全体から毎年五人の優秀な僧侶を選び、永平寺・総持寺両大本山で、三カ年の特別修行を受けさせる制度）の第一期生に応募しましたが、やはり形にはまった生活は私の性に合わず、いよいよ海外に出る決意をいたしました。

宗派にとらわれた日本の仏教ではなく、その根幹を成すもののあるインド。そこへ行こうと思ったのです。ところで、インドに行こうにも金がない。そこで後に開基家となったナリス化粧品に借金を申し込みました。五十万円（一、四〇〇ドル）貸してほしいと直談判したのです。おかげで私の誠意が通り、金一封をいただいたのですが、さて、ペチャンコののし袋に果して五十万円（一、四〇〇ドル）という大金が入っ

ているのかどうか、私は本当に不安でした。誰もいないところにきて恐る恐るあけてみますと、五十万円の小切手が入っているではありませんか。私は「バンザイ！」と跳び上がりました。これでインドへ行ける、行くのならインドだけではもったいないということになり、上座部仏教といわれる二二七の戒律を守るタイ仏教を実地に修行してみようと、ここで一年半にわ



たるタイの修行が実現したのです。

帰国してみると、仏教は正に大乗仏教抬頭前の部派仏教の様相を呈した俳他的な教条主義が、その大勢をなし、また葬式や法事という人間の死のみに関わる形骸化した空虚なもののように強く感じました。そこで私は宗祖を通して釈尊の本源に還り、宗派を超えた全一的な仏教、実存者の教化救済の重要性を痛感し、そのためにはまず広い視野に立脚しなければと思い、再び海外に活眼を開こうとしました。その頃、兄はロスアンゼルス禅センターを開いておりましたので、兄にコネクションをつけて、そこで開教師として二年間勤めさせていただきました。当然ながら、ここでも苦しい生活をいたしました。お金がないなら何をするか…。本を読むことと坐禅をすること、そしてその日その日の出来事を書き綴ることしかありません。三十年来続けている日記は大変な量となって書庫を占めております。また、日本の宗教関係の新聞に記事を送り続けました。そんなアメリカの生活の中で、私はひとつの大誓願をたてたのであります。

釈尊の説かれた何物にも片寄らない中道の教え、捉われやこだわりのない空の教え、すべては因縁によって生起するという縁起の教えをもって人々の心を救う正しい教えを高揚し世界平和と人類福祉の向上に貢献すべく、多くの人々の心の憩いの場所をつくるために「日本に帰ったら新寺を建立しよう」と決意しました。

帰国した私は、三日後に友人の結婚式に出なくてはならなかったのですが、着ていく背広も靴もない。あるのは穴のあいたボロボロの靴一足でした。こんな具合でしたから、借金は苦にならなかったのかもしれません。借りたといってもお金はお金です。

さいわいにして前述のように、小さいとはい

え小庵が手に入ったのですから、あとはやみくもに働いて働いて、けん命にお返ししました。

恵まれた出逢い

こうしたどん底の中で私と共に苦難の道を歩んでくれたのが家内です。寺院運営の実務を担当してくれて、今日までの善光寺の歴史があるのです。

次に開基となってくださったナリス化粧品の社長との出逢いは、私が総持寺で修行中の夏季摂心（五日間の連続坐禅）においてであります。坐禅実修のために上山しておられたナリスの社員の方に、私は思い切り警策（きょうさく）を打ち下ろしておりました。たとえ短期間といえど仏弟子となった人間は、ただひたむきに坐すべしと思ったからの策励です。それをきっかけとして、私がナリスの社員教育に呼び出されました。しかしこれは、参禅会の警策に対する遺恨試合ともいえ

るもので、社員十五名ほどが、警策を受けるための合掌をしつづけている。合掌されれば叩かねばなりません。絶え間なく警策を受ける社員の衣服は破れ血がにじみ、打つ私も息苦しく、手の豆がはじけて真赤になっておりました。その時、先代の社長が一喝されたのです。「お前らのは坐禅ではない。喧嘩だ！こんな事をしたらいかん！」気がつくと、私は社員の方々と仏の慈悲で心と心が結ばれたのでした。

それ以来、ナリスの方々にはさまざまな事業で援助をしていただき、こうして、開基家として、善光寺を護っていただいているわけであります。ナリス化粧品では、私が伺うたびに今度は何の無心かとゾッとしたと述懐しておられます。それでも、幹部の或る人は、「わたしたちはあきんどですから、きれいな心は持ちあわせておりません、でも、もうけたお金を人様のために使ってくださるのが先生だったのです」と、ありがたい言葉をくださったのが忘れられません。

実際、私の要望は、単にお金を援助してくれというだけにとどまりませんでした。一九七〇年に完成した本殿および客殿百二十m²は、このナリス化粧品によって建立が成ったものでありますが、私は、会社単位ではなく、一人一人の小さなお金を集めてほしいと、めんどうな願いをしたのでありますが、これを忠実に守ってくださり、約千名にのぼる社員から浄財を喜捨していただくことができました。ひとりひとりの願いが、やがては大きな実を結び、ひとりひとりに確かな功徳を及ぼすことを私の願いとしたからであります。

開基家との出会いはそれくらいにして、次に現在、善光寺では「成寿」という不定期の季刊誌を発行しておりますが、ここに使われている仏画はすべて、伊藤三喜庵先生の作であります。

先生は日本でも著名な設計家伊藤喜三郎氏で実は、釈迦殿の設計も、伊藤先生の手になったものであります。この伊藤先生とは、今から二十数年前、インドへ行く飛行機の中で知り合い、以来、様々な形で善光寺の護持に尽力していただいております。また、前総持寺副監院であられた龍光寺住職佐藤俊明老師とは、十年前タイへの旅行中、親しく言葉をかわしていただいたのがご縁で、善光寺の様々な企画に参与していただき、善光寺の頭脳中枢ともいうべき尊師であり、私は、父のように慕わせていただいております。他にも、善光寺で働いてくださっている方々おひとりおひとりが、私の手となり足となって私の足らない部分を精一杯補ってくださっております。私は、まさに非力な人間でありますが、自分ができないことは、力のある他の人の手助けをいただくことにより事は成せるのです。

人によって生かされ、人によって救われた経験を生涯忘れることなく、人のお力をお借りしながら、大きな目的の為に更に精進したいと思ってやみません。微力ながら、私ができることは一体何であろうか。

海外留学僧派遣育英会設立

（仏教寺院の役割と檀家組織）

世の中の人が心から願う救い、その救いへ導くのが宗教家の使命であるならば、それをおいて私の使命もないと考えます。ひとりの力がたとえ非力なものであっても、支え合いながら十人、二十人と底辺が広がって行くのなら、絶望的だといわれる未来にも太陽がさしこむはずだろうと思うのです。あの雨の日に、女学生が、三円（一セント）、五円（二セント）と喜捨（きしゃ）してくれ、ようやく息がつけた時に差し込んだ太陽

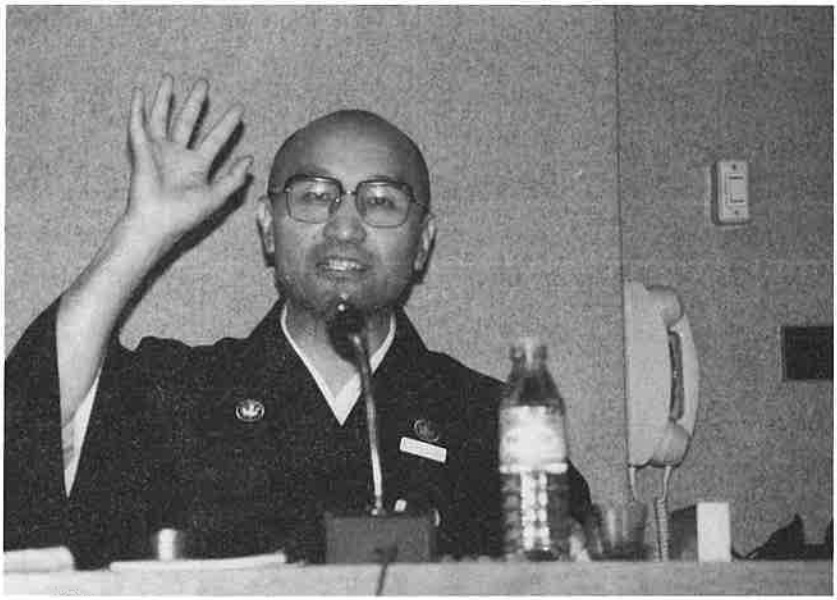
のように…。

私が掲げた次の大誓願は、そうした人づくり、人を育てることであります。

不安の絶望の危機に瀕した現代の社会ほど、釈尊の教法宣布を必要とするときはありません。

日本は、世界最大の仏教国でありながら、仏教界は、遺憾ながら、直接収入につながる仏事を司ることが寺院の大きな目的であるというふうに受けとめているのが現実で、世界の大勢に即応して教化の実をあげる態勢に欠けております。宗派仏教に枝分れした現在の日本では、信仰の対象や教義がそれぞれ異なるために、各宗派が一丸となって事に対処するにはどれだけ待てばいいのでしょうか。すでに窮地にはまりこんだ情勢の中で、「今」すらも逸していつの時を待つのか。滅びの道を突き進むその速度を少しでもゆるやかにするために一人でも多くの人が力をあわせて、いしづえを築きたい。私は、新寺を建立した初心に立ち還って、本当に人を育てるための海外留学僧派遣というこの大誓願を成就しようと発願いたしました。

善光寺が開創十五周年を期して「海外留学僧派遣育英会」を発足させたのは、こうした趣旨によってであります。報恩行の一端として海外に留学僧を派遣し、人材の育成をはかり、もって仏教を振興し世界の平和、人類の進運に寄与したいと願うものであります。募集の範囲は宗派を問わず、場合によっては僧籍がなくてもよし、学業操行ともに優秀で道心堅固、仏道を信ずる心が揺るぎないこと。仏法のため、人のためなら、自らの身命も惜しまざる人材を選んで留学させ、そのための旅費、生活費はすべて面倒をみようというものです。すでに、第一期はタイに二名、第二期はアメリカ二名、インド、スリランカ等に四名、第三期は、アメリカ二名、

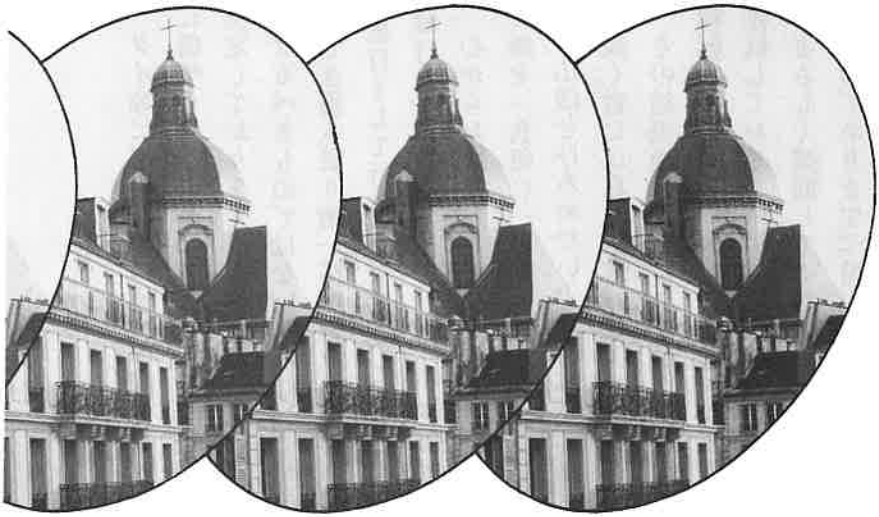


インド、タイ等に四名、その他に中国人を、駒沢大学に留学させ、計十一名となり第四期生もすでに決定しております。こうした事業は、一ヶ寺で成せるべきものではないかもしれませんが、私ができ得る限り精一杯の力を出し切って生涯、報恩行として行きたいと思っております。

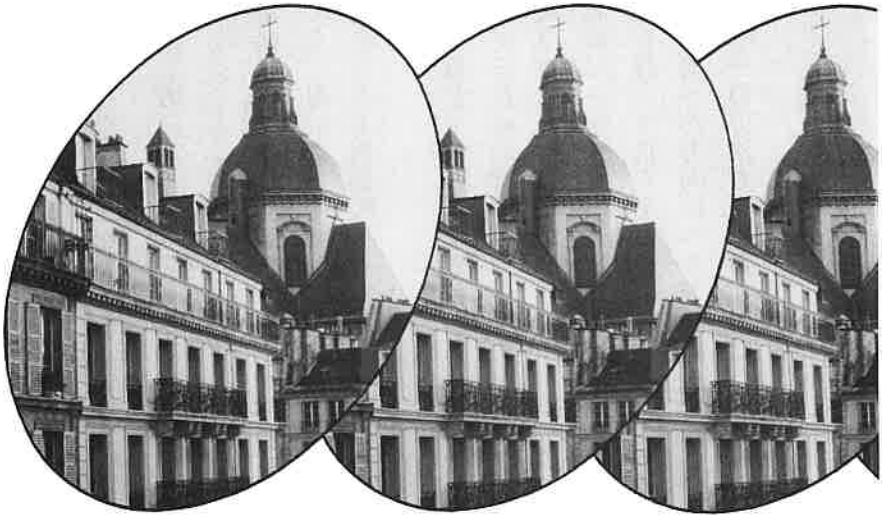
この難行を実行するにあたり、私は檀家の方々に、心からおすがりしてお願いをいたしました。ご飯を一食毎に一口だけ減らしてください。それで仏法をひろめたい…と。私は、〝真実に仏法を説く者には真実を求める人々が集まってきて、その結果物質面でもうるおうようになる。法輪転ずるところ、食輪自ら転ぜられる〟ことを確信しております。これが仏天の御加護ならば、まさしく援助してくださる檀徒の方々は仏そのものであります。「檀家を敬うこと仏のごとくすべし」という瑩山禅師の教えを、ひたすら実践することが、現在の善光寺を形づくり、

海外留学僧派遣という一大事業を可能ならしめたと思います。各国に派遣された留学僧たちは、それぞれの立場で物を見、考え、修行という形に集約させて帰ってくるでありましょう。自ら国を選ぶのですから、当然、その国で学ばなければならないという目的と意図があります。彼らが果たして何を持ち帰り、どんな行動を起こしてくれるのか、それは全くの未知数ではありますが、必ずや宗派意識を超えた本来の姿の仏教徒、死者の供養だけを生業（なりわい）とするような安易な生活者ではなく、釈尊の教えを情熱をもって布教する宗教者になってくれるであろうことを私は信じています。仏を信じるように彼らを信じ、やがて十年後、二十年後の世界に活き活きとした仏法の泉を湧かせてくれることを思う時、私の限りある命が、世の中に何がしかの役に立つという充実感に浸ることができます。

この海外留学僧派遣育英会には、善光寺の総



力を集めた上に、今日における日本の碩学中村元先生、高崎直道先生、鎌田茂雄先生、奈良康明先生、東隆真先生等をはじめ、各界の第一人者約三十名を擁して顧問として助言を呈してくださっております。留学僧の受け入れ先としては、タイ国においては、かつて、私自身が修行したこともあるゆかりの寺、ワット・パクナム。ここでは、戒律のきびしい上座部仏教（小乗仏教）の僧院生活を一年間もしくはそれ以上、実地に体験し、得度式や、布薩式（ふさつしき）を終えることになっています。インドにおいては、すでにカルカッタ大学の印度哲学科に在籍する留学僧を含めて、新たに受け入れ寺院の確認を得るために、今春、常務理事の佐藤俊明老師と共にインドに渡りすべての手続きを終えました。アメリカは、ロサンゼルス禅センター、ゼンマウンテン、ニューヨーク・ゼン・コミュニティ他との受け入れが整いました。ロサンゼルス禅センターは、



全米に十二、イギリスのロンドンにも支部を持ち、米人出家僧と、在家信徒の共同体で、開創は実兄の前角博雄師（母方の姓を名乗る）で、私もアメリカでの修行の大半をここで費しました。インド、タイ、アメリカといった国々は、私が転々と放浪し修行した足跡をたどるような形となりましたが、これも、今日のための仏縁を作っていただいていたのだと思えてなりません。

今後は、ヨーロッパの各地にも拠点を設けて、更なる勉学の場所を広げるべく、着々と準備がととのいつゝある現状であります。役員はすべて無給でこの難事業に参与してくださっておられることは、感謝のほかありません。檀家の方々の尊い援助と、労力を惜しまない顧問、役員の方々のご尽力に支えられて、「海外留学僧派遣育英会」から飛び立っていった留学僧たちが、各国との相互理解をいしづえに、いつかは世界に仏法を広めてくれるだろうことを信じて、私も生涯をこれに身を投じたいと願ってやみません。

宗祖を通して釈尊に還る

私の宗教生活の基盤は、「宗祖を通して釈尊に還る」ということであります。宗祖である道元、瑩山両禅師は、釈尊につながる仏教を純粋に説かれました。私はこの点を特に大切にして、宗祖と釈尊をつなぐ釈迦殿を建立したのであります。

「宗祖を通して釈尊に還る」という言葉は、自分を律するための言葉でもあります。本当のものを見つめて、本当のものを創り上げていく信念を忘れないためであります。いつも仏法の原点に立ち還って自らを見つめることは、ややもすると間違った方向につき進むことを制御してくれる唯一の方法です。ありがたいことに、

私たちはみな、自らの道を護っていただいているわけなのです。そうして生かされている命を、一滴残らず仏法のために、人のために、使い切ってから一生を閉じよう！現世での仕事をし尽したあとの未来は、仏にまかせて安心して歩いていこう！

ご静聴に心から感謝いたします。

ありがとうございました。

合掌。

第二回日仏セミナー「仏教とアジア社会」会議報告

日本側事務局長　坪井善明
北大助教授

「仏教とアジア社会」をテーマとして、第二回日仏セミナーが昨年の一二月八、九、一〇の三日間、パリ市四区マーラー街九番地パリ第一大学会議室で開催された。このセミナーは上智大学アジア文化研究所とパリ第七大学第三世界・アフリカ研究センターの共同主催により開かれたもので、日仏共同の国際研究プロジェクト「宗教とアジア社会」の枠組みの二回目として挙行された。第一回目のセミナーは「キリスト教とアジア社会」のテーマで、日本学術振興

渡仏する一行

会と仏国国立科学術研究センターの日仏科学協力事業として一昨年（一九八六年）九月二九日から五日間、東京にある上智大学で開かれた。

第二回の成果をふまえ、パリで、特に、仏教がどのような組織とリーダーを育成しながら宗教活動を続けたのか、各アジア社会の民衆に対して、その社会に根づいた仏教はどのようなメッセージを強調して伝えたのか、を中心に、仏教の社会的、政治的機能の比較研究を行なうことになった。

今回のセミナーの特徴は次の二点に要約できる。㈠、比較研究の対象が空間的にも時間的にも多種多様であったこと。つまり、日本、中国、タイ、ラオス、ヴェトナム、ビルマ（紙上参加）と東アジア・東南アジアの六ヵ国の仏教と社会が論ぜられ、時間的にも、中世、近世、現代の仏教と当該社会との関係が討議された。㈡、仏教を仏教学者だけが論ずるのでなく、様々な分

野で活躍する学者・宗教家が参加し、一般の人々に対して、六ヵ国の仏教と社会の特質をわかり易く説明しようとしたこと。後述のリストで見る通り、宗教学、歴史学、民族学、政治学、仏教学という多彩な研究者ばかりでなく、曹洞宗僧侶の宗教家も参加して頂いた。

三日間のセミナーの研究発表のテーマと発言者は次の通り

第一日（一二月八日）

開会の辞

基調報告

「儒教国家中国における仏教と権力」

レオン・ヴァンデルメルシュ

（パリ大学高等研究院教授
前東京日仏会館学長
宗教学）

「二つの車輪―仏法と王権―」

加藤栄一

（東京大学史料編纂所教授
歴史学）

「日本社会と仏教伝統における帝釈天」

ベルナール・ランク

（コレージュ・ド・フランス教授
日本仏教学）

「中国における民衆宗教とキリスト教」

矢澤利彦

（埼玉大学名誉教授
中国キリスト教史）

第二日（一二月九日）

「タイにおける現代仏教の諸傾向」

ソラーンジュ・ティリ

（パリ大学高等研究院教授
東南アジア宗教社会学）

「覚霊を資助して仏果を成ぜんことを」
―日本における仏教の土着化の一様相―

奈良康明
（駒沢大学仏教学部教授
仏教学）

「ラオスにおける一九六〇年以降の
政治社会変革と仏教の変質」

ピェール・ベルナール・ラファン
（パリ大学高等研究院教授
民族学）

「一九六〇年代の南ヴェトナムにおける
仏教徒の政治参加」

グェン・テ・アイン
（国立科学研究センター研究員
元フエ大学学長
政治経済学・歴史学）

第三日（一二月一〇日）

「新しい教化路線を求めて
―一五年の軌跡とその成果―」

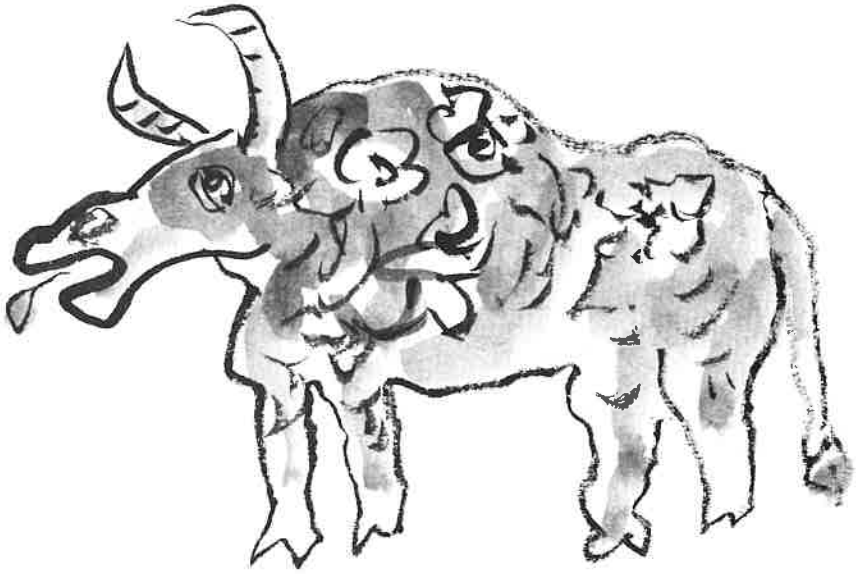
黒田武志
（曹洞宗善光寺住職
宗教家）

総括討論

閉会の辞

セミナーは仏語・英語・日本語で行なわれたが、同時通訳の立派な設備があり、特に平安時代の天台宗を専攻するパリ第七大学助手ジャ

ン・ノエル・ロベール氏の協力もあって、難解な仏教用語もスムーズに翻訳され、大好評であった。連日、新進の学者の卵達、仏教に関心をもつフランス人、高名な知識人たちが熱心に聴講し大成功であった。このセミナーの詳細な報告書は、日仏両国語で年内に出版される予定である。



加藤栄一教授　奈良康明教授　ベルナール・ランク教授　黒田方丈

お不動さまの話

仏・菩薩・明王

佐藤　俊明

今日はお不動さまの眷属（けんぞく）・矜羯羅（こんがら）・制吒迦（せいたか）二童子の開眼供養がおこなわれますので、お不動さまについてお話し申上げます。

お不動さまといえば昔からたいへん人気がありまして、今日でも、日本全国どこへ行ってもお不動さまを拝むことができます。成田の新勝寺や川崎の平間寺といった有名な大寺院のご本尊もあれば、ごくささやかなお堂にひっそり鎮座ましますお姿もあり、また路傍にたたずむ石像の場合もありますが、いずれも火焔を背にして、右手に剣、左手に綱を持った忿怒の形相にはかわりなく、宗派を超えて広く大衆に親しまれております。この点、観音さまやお地蔵さまとよく似ておりますが、観音さまやお地蔵さまは菩薩ですが、お不動さまは明王であります。

菩薩というのは仏さまの候補者、やがて仏になるお方のことですが、観音さまやお地蔵さまは、菩薩でも普通の菩薩ではなく、仏となる資格は十二分に備えておりながら、あえて仏にならず、衆生と苦楽を共にしながら衆生を救済し、一切衆生が救われるまでは仏にならぬという大誓願に生きられる方であります。これに対して明王というのは、仏の分身、化身で、忿怒の相をあらわし、教化しがたい剛強難伏（ごうきょうなんぶく）の者を折（しゃく）

伏し救済する方々であります。

明王といえば愛染明王とか孔雀明王などは皆様のお耳に親しいかと思いますが、お不動さまは数多い明王の中でも中心的なお方であります。

菩薩は仏の候補者、明王は仏の化身でありますので、まず仏についてお話しいたします。

お釈迦さまは今から二五〇〇年前、二十九歳で出家し、六年苦行の末、最後は坐禅によって、三十五歳の齢の十二月八日、明けの明星をごらんになってお悟りを開かれ仏となられました。仏とは悟った人のこと、理想的な人格者のことであります。お釈迦さまは歴史上この世にあらわれた最初の仏であります。しかし、お釈迦さまには自分をこの世における最初の仏とはなさらず、自分は古仏の跡を歩んだに過ぎないのだといわれました。つまり仏教はお釈迦さまの新発明ではなく、何億年も前、とっくの昔に悟ら

れた過去の仏さま、過去仏から生まれたものだといわれ、過去世にあらわれた仏さまを数多く挙げておられます。そうかと思うと、ご自身が亡くなるとしばらくは無仏世界になるが、五十六億七千万年経つと、兜率天で修行しておられる弥勒菩薩の修行が完成して弥勒仏となって娑婆世界に下生されるといわれ、つまり未来仏を説いておられます。そうかと思うと、お釈迦さまの大慈悲心を現実に具現したいろんな仏さまを世に出現させ、さらには、仏は一人格にとどまらず、森羅万象、日月星辰ことごとくが仏であり、一切を遍く照らす太陽は最高最大の存在として、太陽を象徴化した毘盧遮那仏、つまり大日如来様が説かれるに至るのであります。

ところで太陽はまことに有難い存在で、私たちは太陽なくしては一刻も生きてはゆけないのでして、いわば身体と一体のようなものであります。したがって特別の場合はともかくも太陽に感謝の気持ちを持つことはあまりないのです。またあまりにも偉大なものですから太陽に甘える気持ちも起きないのです。たとえばわが家の南隣りに高層建築が出来て日が当らにくなったからとて、「太陽さん、太陽さん、いままでどおり日光を恵んでくださいな」と言ってもそれは通じない願いであって、太陽は公平無私、私情は一切受けつけません。これはあたり前のことですが、人間これでは満足できないのです。

三　輪身

大日如来は太陽のようにあまりにも崇高で威厳があるので、甘えられない。そういう仏の姿を自性輪身というのであります。自性とはおのずからなる性格、性質のこと、輪とは法輪、つまり仏法のこと、身は身体のことなので、天地自然のありのままの姿を示す仏のことを自性輪身というのであります。自性輪身を見て悟れる

人は、いわばノーベル賞を受けるくらいの優秀な人で、一般の人にはとりつく島がないのです。

或る人が明恵上人に、私は今落ち込んでおります。なんとか運が開けるようにご祈禱してくださいと頼みましたところ、明恵上人は、「私は朝夕すべての人びとが幸せになるよう祈禱しているから、さだめし御身もその中にはいっているはずだから、別して祈る必要はない。また、叶うべきことなら叶うであろうし、叶うまじきことなれば仏の力も及ぶまい」と答え、さらに「身を正しく在るべきようふるまえば神仏は護りたまい、願望は成就するであろう」と諭されたということですが、そう諭されて、「はい、わかりました」と気持ちの整理のできる人はごく少なく、そこをなんとかと願う心があるから、ご祈禱が繁昌し、そのためにこそ寺や神社にお参りする人が多いのです。それが証拠には、お参りの仕方を見ていると、百円じゃもったいないとばかり、十円硬貨を探し出して賽銭箱に投げ入れ、一千万円の宝くじが当るようにといったたぐいの願をかける人が多いのです。このような人間の願いにこたえて、仏さまはやさしい菩薩の姿をあらわすのです。それを正法輪身といいます。正法とは正しい仏法のことで、正しい仏法をわかりやすく説いてくださるお姿のことで、自性輪身である大日如来は正法輪身として般若菩薩の姿をあらわすのです。菩薩はいわば母親の姿であります。子供の甘えをやさしく受け入れ、その甘えの中から伸ばすべきものは伸ばし、矯めるべきものは矯めてゆくように、やさしく衆生を導いてくださるのです。ところが子供は成長するにしたがい、ともするとやさしい母親を甘くみて、言うことをきかなくなります。そこで必要になってくるのが父親のきびしさであります。厳父慈母という言葉がありますように、子供の教育にはやさしい母の愛情と

ともにきびしい父親の威厳がなくてはなりません。それと同じようにやさしい菩薩の教えに耳を貸さないで悪事をかさね、いよいよ仏から遠ざかってしまう人も少なくないのです。そこで忿怒の形相をもって是が非でも引張ってゆく導き方が必要になって来るのでして、そういう仏の姿を教令輪身というのであります。教とは教え、令とは命令の令で、命令、号令で教え導いてゆくという意味で大日如来は教令輪身としてお不動さまの姿をあらわすのであります。円満崇高な自性輪身では近寄り難く、柔和な正法輪身では甘えてしまう。そこで忿怒の形相ものすごいお不動さまのお出ましとなるのであります。

私にこんな体験があります。軍隊時代のことであります。昭和十九年の十二月、戦局は日に日に悪化してゆく暗い年の暮れのことであります。私は満洲の新京、今日の中国東北長春の部隊から中支南京の部隊に転属することになり、私の所属する部隊から軍曹以下五十名、他の部隊から曹長以下五十名、併せて百名の下士官、兵を引率して赴任することになりました。私の部隊は軍紀厳正な部隊でしたので、お別れの儀正も早々に済ませ、発車一時間前には新京の駅にはいりました。ところが別の部隊の五十名が中々やって来ません。十五分前ごろになってようやくバタバタとホームに入って来ました。一見して酒を飲んでいることがわかりました。私はホームの中央に仁王立ちになって、

「待て！引率者は誰か？」

と怒鳴りました。すると赤い顔をした曹長が駈歩で私の前に来て挙手の敬礼をし、「ハイ、蜂須賀曹長であります」と言う。私は

「申告せい！」と叱咤しました。

軍隊では身辺に異動が生じた場合は「陸軍××何某、今般何々を命ぜられました。こ

こに謹しんで申告します」というように必ず上官に申告するのがきまりです。蜂須賀曹長、はっと気付いて、改めて挙手の敬礼をして申告しようとしました。私は、

「馬鹿もん！お前だけの転属じゃないだろう」と怒鳴りつけました。

蜂須賀曹長、いよいよあわてて、五十名を二列横隊に並らべ、「輸送指揮官殿に敬礼、〃頭（かしら）、

中!!」「申告します。○○部隊蜂須賀曹長以下五十名は南京××部隊に転属を命ぜられ、只今到着しました。ここに謹んで申告します」と型通り申告しました。そこで私は〝休め!!〟〝気を付け〟と号令をかけ、軍刀を抜き、お不動さまのように剣を腰にかまえ、

「私は輸送指揮官の佐藤中尉である。お前たちを南京まで輸送する一切の責任を負う。よって只今より輸送指揮官の命令、指示以外に一歩も出ることを許さん。違反した者は容赦なく処断する。注意、一つ、南京に到着するまで一滴たりとも酒を飲むことを禁ずる。二つ、持って来た酒は全部前に出せい。南京まで預る」と、お不動さまよろしく忿怒の形相をもって臨んだのです。驚ろいたことに随分たくさんの酒を持って来ておりました。軍紀の弛緩した部隊で、見送りに来た部隊副官も中隊長も私の威厳に圧倒されて小さくなっておりました。この時、お不動さまの威厳を示さなかったら統制がとれなかったことと思い、お不動さまの身を以て示される教えの有難さをしみじみ感じた次第でした。

にくしとて　たたくにあらず　雪の竹

今日の社会にいま少しお不動さまの慈悲があったら問題の青少年の数は半減することでありましょう。

アチャラ・ナータ

お不動さまはもともとインドの仏さまで、梵語でアチャラ・ナータといいます。アチャラは動かないこと、ナータは尊いお方という意味です。ところがお不動さまの姿は尊いお方とは似ても似つかない召使いの姿であります。これは仏として最高の位にある世にも尊い大日如来が剛強難伏の者を救うために示された尊い慈悲心のあらわれとみるべきであります。そこでまずお不動さまのお姿を拝見することにいたしまし

よう。まず頭の上には七莎髻のあるものと、八弁の蓮華をいただいてるものがあります。七莎髻とはインドの原野に自生している莎草を用いて髪を七つに束ねていることであり、これはインドの奴隷の風習だといいますが、七つに結んでいるのは七代生まれ変って主人に仕える心をあらわしたものであります。また、インドでは六をもって宇宙の完俗性を示し、七は再生であり、無限につらなるということを意味し、さらにそれは永続性・永遠のシンボルだといいますので、七つに結髪するお不動さまは大日如来さまに永遠にお仕えし、無限に活動する姿といわれます。

次に八弁の蓮華、八つの花びらを持つ蓮華をいただくのはどういう意味かというと、八弁の蓮華は蓮華蔵世界を表わすものとされ、蓮華蔵世界は大日如来の世界であります。したがって八弁の蓮華をいただくことは大日如来を頭上にいただくことなのです。

次に束ねられた髪が左の肩に垂れております。これは慈悲の象徴だといわれ、私どもがその一髪にとりすがると、たとえ極悪人でもその苦悩から救われるというのであります。

それから額に水波のしわがありますが、これはほかの仏像には見ることのないお不動さま独特の特徴で、迷っている衆生を心配している印、あるいは怒りをあらわしているともいわれます。

目は左の目をかすかに閉じ、半開の右の目で睥睨しているものと、或いは両眼をカッと大きく見開いているものと二種類あります。右の目を半分開いているものは二つの牙を上下につき出しており、両眼を見開いているもは二つの牙を上または下に突き出しております。口は閉じて一文字に結び、下唇の左の方を外にひるがえしております。これは相手に恐怖を感じさせる

ものであり、さらには役に立たない無駄話をしないということをあらわしたものであります。

右手の剣は智慧と力のシンボルで、この剣は特に倶利迦羅剣といって倶利迦羅龍王が刃に巻きついているものもあります。これらは仏教の基本原理である中道を悟らせる智慧の剣であると共に、煩悩を断ち切る降魔の剣でもあります。左手の羂索は慈悲の表示でこの縄で凡夫を縛り、引張って菩提に導くのであります。

最後にお不動さまは大火焔を背にして磐石の上に坐るか、又は立っております。何物も冒し難い不動の姿勢であります。大火焔は忿怒の形相をより具象的にまた効果的に表現したものであり、あらゆる煩悩を焼きつくす威力をあらわしたものであります。

このように激しい怒りとはかり知れない力の象徴にはいかに剛強難伏の者といえども圧倒されるのであります。

五大力と眷属

お不動さまは東西南北に四人の仲間を持っております。これにお不動さまを加えて五大明王とか五大力といってますが、いずれも悪魔降伏と仏法守護にあたる方々で、

東方は降三世夜叉明王、阿閦如来の化身
南方は軍荼利夜叉明王、宝生如来の化身
西方は大威徳夜叉明王、阿弥陀如来の化身
北方は金剛夜叉明王　不空成就(釈迦)如来の化身

で、お不動さまは真ン中におられます。

なお東方の阿閦如来、南方の宝生如来、西方の阿弥陀如来、北方の不空成就如来つまりお釈迦さま、それに中央の大日如来を加え五智如来といいます。

次にお不動さまは、三十六童子、八大金剛童子といって、手となり足となって下働きをする眷属を持っております。中でも代表的なもので、常にお不動さまの身辺にはべり犬馬の労をとるのが矜羯羅・制吒迦の二童子であります。名前を覚えにくい人は「小柄な童子」「背高のっぽ」を連想すれば忘れても思いだせるでしょう。童子ですからいずれも中学生年輩で、矜羯羅童子は蓮華の冠をつけ、合掌して独鈷を指の間にはさみ、天衣と袈裟をかけております。この童子は小心・随順といわれ、やさしい顔をしております。これに対し制吒迦童子は頭に五髻を結び、右手に金剛棒、左手に金剛杵を持っております。この童子は瞋心・悪性といわれ、にくにくしい顔をしております。お不動さまはこの二童子の特徴をよく使い分けて衆生を救われるのであります。これらの眷属はそれぞれ一千万の童子を従えているといわれます。

『不動経』に「聖無動の眷属、三十六童子各々千万童を領す。本誓悲願の故に千万億の悪鬼、

行人を嬈乱せん時、此の童子の名を誦すれば、皆悉く退散し去らん、者し苦厄の難、呪咀病患有らん者は、当に童子の号を呼ぶべし、須臾にして吉祥を得ん、恭敬礼拝する者は、左右を離れず、影の形に随ふが如く護ら、長寿の益を獲得せしむ」とあります。

お不動さまの家来の三十六童子はおのおの千万人の童子を従えている。本来の誓いである悲願のゆえに、たとえ千万億の悪魔が修行者をたぶらかそうとしても、この童子のお名前を唱えれば悪魔は皆残らず退散してしまう。もしも苦労や因難、呪いや病気のあるものは、まさに童子を名号を呼べば、ときを移さずに吉祥を得るであろう。つつしみうやまって礼拝するものは、その人のそばを離れずに、影の形に従うようにして護り、長寿のご利益を獲得させてくださる。というのであります。したがって矜羯羅・制吒迦の二童子を迎えてお不動さまのご威光はいよいよ輝きを増すことでありましょう。

身代不動明王

お不動さまは多くは真言宗の寺に祀られるのですが、禅寺の当山にどうしたご縁があったのでしょう。それは今から二十三年前のこと、方丈さまは永平寺、総持寺の両大本山で修行なされ、タイに修行に出かけようとなされたのですが、その当時はタイといえば悪疫瘴癘の地で、わずか一週間程度の旅行でもいろんな注射をして出かけなければなりませんでした。ましてやその地で一年以上も修行するとなればさらに命がけのことであります。そこで方丈さまは守り本尊を作って、仏さまにお護りいただこう。万が一命を失なうようなことがあったら、親には申訳ないがせめて身につけていた仏さまだけは無事帰っていただこうと思い、守り本尊をどこの誰に彫ってもらおうかと思案した時、ふと、

永平寺で修行していた際、福井駅に素晴しい一葉観音の彫刻が展示してあったことを思い出したのです。

一葉観音というのは、道元禅師が中国から帰国の途中、大暴風雨に遭い、船はいまにも難破しそうになったのです。その時道元禅師は一心になって観音さまを念じられました。すると波間に蓮の葉に乗った観音さまがあらわれ、波をしずめてくださった。そのおかげで無事帰国できましたので、道元禅師はその観音さまの姿を仏師に描かせたのでありますが、それを模刻したのが福井の駅にあったのです。それで方丈さまは「誰が彫ったのですか」と駅員にたずねましたら、すぐ近くに住む山口という仏師が彫ったものと知らされ、早速仏師の許を訪れ、「お守りにしたいから一葉観音を彫ってくれ」と頼んだのでした。その時山口さんから、「あんたどこから来た？」と聞かれたので「目黒」と答えたそうです。方丈さんは当時五反田の桐ヶ谷におられたのでそう答えたのです。すると「目黒の不動さんの伜か!?」といい「このお不動さんを持って行ってくれんか」というのだそうです。わけをたずねたところ、山口さんが言うには、「ついせんだって、四国から霊能者が訪ねて来て言うには、『お不動さまが夢枕に立ち、〝福井の大きな寺の近くに彫師がいる。その彫師の彫ったお不動さまをお迎えせよ』というので、はるばる四国からやって参りましたが、お宅に来ておどろいたことには夢のお告げに出たお不動さまと全く同じです。どうか私にこのお不動さまをお授けください」というんだそうです。ところがどうしたわけか山口さん、どうしてもその人におゆずりす気になれず、お断わりしたのだそうですが、日が経つにつれてそれが気になって仕様がなくなった。丁度そのへ方丈様が行われたものですから、「持っていってくれ」とい

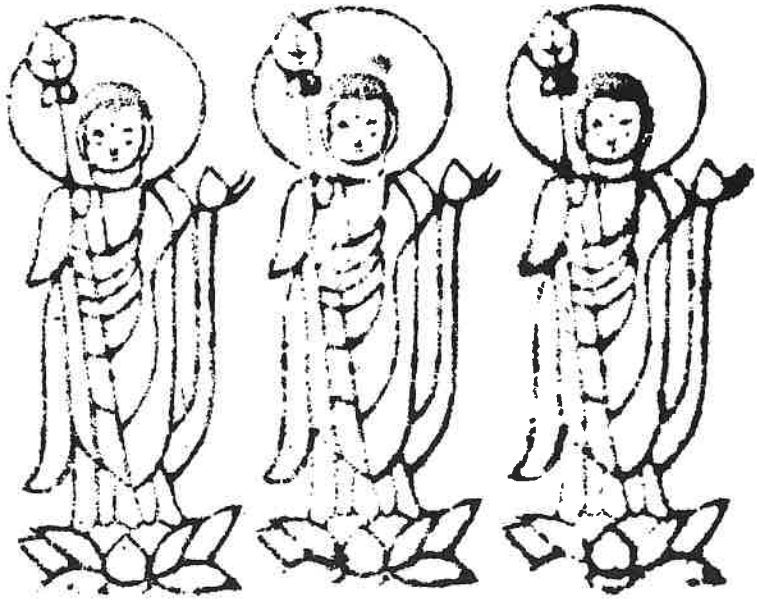
うようなことになったわけです。そこで、それではということでお不動さまを譲り受けることになったのです。方丈さまも真剣に頼んだのでしょうし、山口さんもこの人ならと見込んだのでしょう。そして、お受けはして来たものの祀るところがありません。それで本寺の光真寺様にお祀りしていただくことをお願いして、タイに行き、引続きアメリカに渡り、帰って来てようやく小さいながらも本堂ができましたので、光真寺さまにお預り願っていたお不動さまをここにお遷ね申上げたわけです。

このお不動さまは、身を七つに変じて方丈さまが困った時は必ず救ってくださるというお告げだというのです。

方丈さまが身代不動さまをお迎えする時、夢を見られた。その夢というのは、鶴見大本山総持寺が燃えているんです。こりあ、たいへんだ、ということで、お師匠様、黒田白純大和尚様は、総持寺顧問会の会長でしたので、お師匠様に連絡し、案内して駆けつけたところ、総持寺は焼けておらず、勅使門のうしろの長廊下の中雀門のところにお不動さまの台座だけが残っており、お不動さまが身代りになって焼けて総持寺を火災から守ったというんだそうです。そうした不思議な夢を見て以来、お不動さまは善光寺に関する限り常に身を変じてどんな願いでも叶えてくださると、方丈さま確信されたのだそうで、今日の当山の奇蹟的な発展はお不動さまのおかげだと、自らも堅く信じ、常に人にも語っておられるところであります。それほど有難いお不動さまをお祀りしているのに、これまで十八年もの間、お不動さまを一人身にしておき、使い走りをする矜羯羅、制吒迦の二童子をお迎えしなかったということは遅きに失しているではないかという人もあろうかと思いますが、私はそうは思いません。というのは、

方丈さまは、矜羯羅童子、制吒迦童子になり切ってお不動さまにお仕えしてこられたのであります。次々と奇想天外な企画をし、一寺院の枠を越えた大事業を展開してこられたその姿はまさにお不動さまにお仕えする二童子の姿そのものといえるのであります。しかし、方丈さまは来年五十歳になります。五十ともなると身体のおとろえを感ずる年頃であり、今までのように二人前三人前の仕事は無理になって来ます。この時に当り、大仏師錦戸新観先生に制作の御快諾を得て、まことに素晴しい二童子の尊像をお迎えでき、本尊身代り不動明王をお迎えするまで四、五年の間お祀りくださった本寺光真寺の方丈さまを煩わして開眼供養がおこなわれましたことは誠に意義深くまた有難い勝縁であります。

当寺に今日の隆盛をあらしめた身代不動明王さまは、いまここに矜羯羅、制吒迦の二童子を

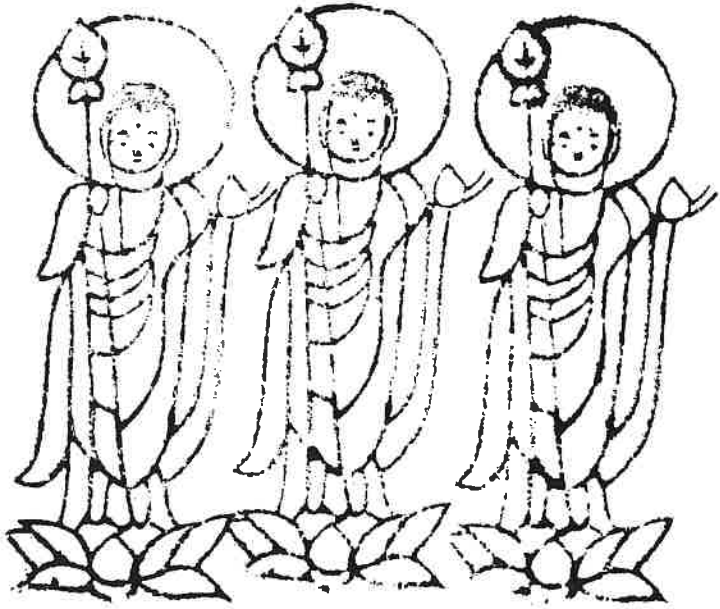


身近かにはべられることができ、いよいよ霊験あらたかなおはたらきをしてくださることと信じます。どうか皆様方も足しげくお参りしてお不動さまに対する信心を一層深め、より豊かな、より意義のある人生を歩まれんことをお願いします。

『不動経』に

我が身を見る者は菩提心を発さん
我が名を聞く者は惑を断ち善を修せん
我が説を聴く者は大智慧を得ん
我が心を知る者は即身成仏せん

とあります。お不動さまのお姿に接し、お不動さまのお名前を聞き、お不動さまの教えに耳を傾け、お不動さまのお心を知ってこそ素晴しい人生が開けてくるのであります。どうかそうした人生が開けますよう今後の御精進をお願いして話を終えます。



矜羯羅・制咤迦二童子開法要に於て、
十一月二十八日

仏との出逢い

大仏師　錦戸　新観

皆さん　おめでとうございます。

昨年九月頃に善光寺さまからお電話がありまして、〝うちのお不動さまは、大変ご利益があります。この度御告によって、矜羯羅・制咤迦の二つの童子を創っていただいきたい〟とおっしゃるんです。私も年をとって、めんどうな仕事は遠慮させていただいているんですが、〝御告によって〟という言葉に考えてしまいました。

御告に依るということは、仏さまのお言葉であるということです。仏さまがおっしゃるのですから、これは何としても創らねばなりません。創らせていただかなくてはならないと思いまして、それでは是非やらせてくださいと、申し上げました。

早速、奥さまとご一緒にお見えになられまして、あらためて、霊験あたたかなご本尊さまのお話を伺いました。

ご本尊さまに、少しでも似ていなくてはなりませんし、仏像を作るには約束事もございますから、一度拝見させていただこうと思いまして、こちらへお参りに参ったわけでございます。

方丈様のお話しを伺いますと、とても並のご信頼ではありませんし、事実、わずかの間にこの大寺院が作られたわけです。とりわけ、私が一番心魅かれたのは納骨堂でございます。およそ納骨堂というところは淋しいところです。ところが、私がこちらの納骨堂に入りますと、〝ああ、ここの仏さまは救われているんだなあ〟と感じました。だからここまで発展なさったのだとも感じたのです。

こうしてご本尊さまを拝ましていただいて、想を練り、出来上がったわけですけれど、私は、

自分が創ったとは思ってないんです。みんな仏さまが私の手を通して創らしてくださっているんだなと思うのです。あとを振り返ってみますと、そんな形跡がたくさんございます。だから私は大仏師という言葉は嫌いなんです。私はまだまだ充分に満足する仕事は出来ていないんですから。いつも大工だと思っているんです。本当に自分の仕事というものはどういうものであるかと考えています。ですから私は年中、絶え間なく悩んでいるんです。

若い頃は、こちらの山からあちらの山へ空を飛ぶ夢をよく見ましたが、今は、大きな荷物を背負って山を登る夢なんです。そしてフーフーいいながら帰る道がわからないのです。ということは、まだ私の中にあれやこれやというものが残っている。荷物になっているんですね。夢ぐらいはもう少し楽な夢を見たいものだと思うんですが、それが潜在意識となっているんです。

これは、仏さまが私の手を通して創ってくださっているということだと思うのです。

第七回の個展を機会に、「仏との出逢い」という本を出しました。これは、昭和十九年から私が時折に書いた詩や歌をまとめたものですが、まとめるにあたって年表を見ましたら、どうしてこんなに仕事ができたんだろうかと思うんです。やっぱり仏さまが、創らせてくれたんだなあ。しかし、私の作品に点数をつけたら、七十点か八十点です。そういうわけですから、決して私は、自分自身がうまいとは思っていません。ただ真心をこめて彫るだけであります。仏さまのあしたに念じ夜に念じ、仏さまを離れず、仏さまと一緒に制作している状態であります。

この度このような、善光寺さまという素晴しいご縁をいただいたというのも、すべて仏さまのお手配であろうと思います。

これからこのお不動さまのうしろに（佐藤御老師からお話がありましたように、大日如来の化身でありますから）今この大日如来を制作中であります。来年の今頃は、おそらく出来上る予定でありますけれど、無相の法身虚空同体というすごいお方ですから、お経の中にもありますように、信心が深ければ深いだけのご利益、浅ければ浅いだけのご利益ということが説かれておりますから、みなさまが本当に心をこめて念願なされば、必らず願いはかなえられると思います。

おわりに臨みまして、善光寺さまの益々のご発展と、みなさまのご健康とお幸せをお祈りして、挨拶にかえさせていただきます。ありがとうございました。

禅と衣食住(4)

お斎(とき)

(駒沢女子短期大学学監　教授)
東　隆　真

禅門では、朝食を粥(しゅく)、昼食をお斎(とき)もしくは中食(じき)、夕食を薬石(やくせき)とよびます。

前号で申したとおりです。

そして、前号では、朝食の粥についてのべましたので、ここでは、昼食のお斎に関して、しるすことにいたします。

さて、お斎の斎という漢字には、いくつかの意味があります。「ものいみする」、「つつしむ」などの意味もあります。「斎戒沐浴(さいかいもくよく)」「精進潔斎(しょうじんけっさい)」といったことばは、そういう使い方でしょう。

いま、ここでは、正午以前に摂る僧侶の食事、お寺の法会などのときに出す食事のことです。

禅宗のお寺では、お昼の勤行がおわったあと、だいたい午前十一時ごろ、お斎になります。

大本山永年寺、大本山総持寺をはじめとする各地の専門僧堂では、中食の場所は、正式には、僧堂です。

ご飯、お味噌汁、香のもの、それに季節の野菜が加わることがあります。魚や肉類は、食べません。

ご飯とお味噌汁は、一度だけお代りをしてよいことになっています。

いずれにせよ、植物性食品を中心とした食べ物ですから、いってみれば、大変な粗食です。

そのために、なかには健康を害する修行僧もいないわけではありません。

しかしそれは例外中の例外でして、私が二十歳前後の雲水時代を想いおこしてみますと、みんな元気いっぱいでした。私などは、とにかくお腹がすいてたまらなかったものです。いくら食べても、そのあとからお腹がすいてくるのでした。「比丘の口、かまどの如し」とは、よく言ったものです。

このごろのように飽食時代といわれる異常な状況を迎えますと、かえって、ごく平凡であたりまえの考えに逆もどりするのでしょうか。いわゆる粗食の重要性に注目する意見が出てまいります。

先日、新聞を見ておりますと、二十一世記の日本人の食環境について、タレントの竜虎さん

は、健康保持のために、一食ぐらいは、薬のような味気ないものを食べて我慢しなくちゃいけないといっておりました。タレントの芳村真理さんもおなじような意見で、漢方薬の材料のような東洋的な食べ物が大半を占めるでしょうと言っています。

学生が、禅寺の食べ物を栄養学的な見地から調査したことがあります。

そのくわしい結果はわすれましたが、ひじょうに理にかなった食べ物だということであったと記憶しています。

前後しますが、施主がお寺にお食事を供養するのを、添菜とか吉凶斎といいます。

前号で申したとおり、粥座でも中食(お斎)でもそうですが、食事をするときは、厳格な一定の作法と順序によって行われます。

そのような食事作法をしるした代表的な書物が、鎌倉時代、道元禅師によって著わされた『赴粥飯法』一冊です。

『赴粥飯法』には、箸のあげおろしまで、心こまやかな配慮のもとにつづってあるのですが、そのなかで、道元禅師は、お釈迦さまの教えを引いて、おごりたかぶった態度で食事をしてはならない、恭しく敬いの心でいただきなさいと示しておられます。

食べ物は、仏さまのおいのちであるからです。

また、「出生」ということが説かれています。

これは「お生飯」ともいいますが、「五観の偈」というおとなえごとがおわって、七粒ばかりのご飯粒をあらかじめとりだして、自分以外のすべてのものに施してから、食事にとりかかるという作法です。

とり出したお生飯は、あとで、庭や池の馬獣や魚に施すのです。

善光寺の黒田大円老師が、海外留学僧派遣育英会をはじめるにあたって、檀信徒のかたがた

に、ご飯を一食ごとに一口だけ減らして下さい、それを私の方にまわして下さい、そのお力を結集して、仏法興隆のための人材を育ててやって下さいとよびかけておられるのは、まさに「出生」の精神の現代化の一つにほかなりません。

ところで〝肉や魚は食べないと、まえに申しましたが、ふつう寺院の食べ物を「精進料理」といいます。

江戸時代、黄檗宗が渡来して、「普茶料理」が登場し、茶道の方では、「茶懐石」が生れて、日本人の味覚をはぐくんできたのでした。

道元禅師の『典座教訓』や『赴粥飯法』は、茶道や小笠原流礼法の源流となったという人がいます。

たしかに、そう言っても、言いすぎではないでしょう。

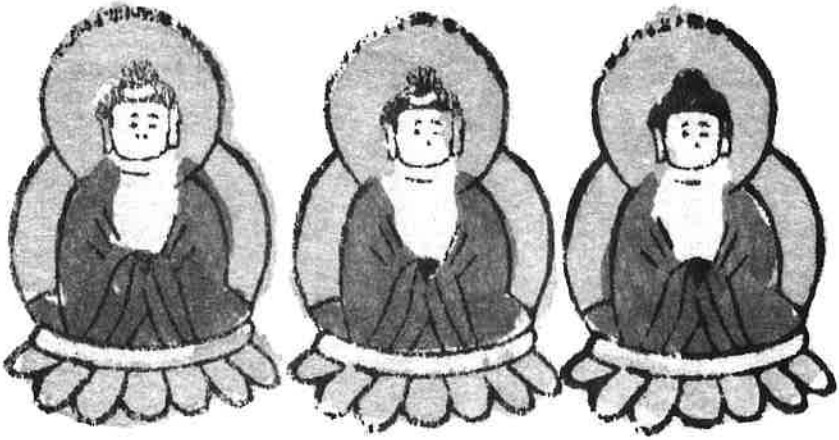
旧日本陸軍の生活様式は、小倉の第十二師団軍医部長、森林太郎（鷗外）が、親交のあった曹洞宗安国寺（北九州市）住職、玉水俊虡和尚を通じて、禅宗の合理的で簡便な作法を採用したところが多いといわれているのは、有名なはなしです。

松本清張の出世作となった「或る小倉日記伝』のはじめの部分に、鷗外と俊虡のことが出てまいります。

うちの教授で、三十数年来の友人、玉水俊哲師（安国寺住職）から、俊虡和尚に関する資料をもらっていますので、そのうち、調べてみたいとおもっています。

先般、ある人の書いた集団給食概論という書名だったとおもいますが、パラパラと頁をめくっていたところ、道元禅師は、集団給食、栄養管理の神さまだとのべてありました。

ヒポクラテスは医学の祖、ナイチンゲールは看護婦さんのご先祖だとすれば、道元禅師は食事のパイオニアであるというわけです。



ずいぶん道元禅師をもちあげたかも知れませんが、ぜひ、『典座教訓』、『赴粥飯法』を読んでみて下さい。

そうすれば、すばらしい日本人がいたということがおわかりいただけるでしょう。

なお、ここに加えておきたいことがあります。

仏教では、かたちをもった物質的食べ物（段食という）のほかに、かたちをもたない精神的食べ物があることを説いています。

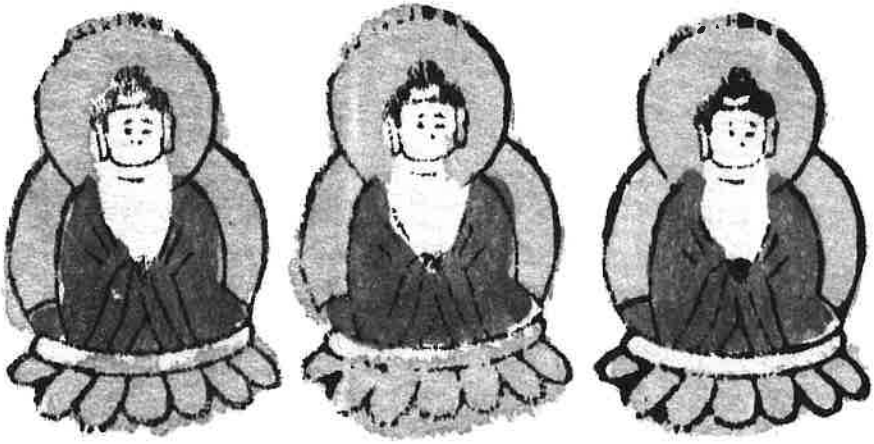
たとえば、次のとおりです。

触食――感覚的に、うれしいことやたのしいことに出会うと、健康によい。

思食――苦墳にでくわしても、意志や希望をもつことによって、身心をそこなうことがない。

識食――こころの働きが、身心を育てる。

禅悦食――坐禅のよろこびに安住すると、食べ物をとらなくても、十分に身心



が満足する

法喜食（ほっきじき）――仏を見、おしえを聞く楽しみによって、健康である。

願食（がんじき）――誓願をもって修行するとき、なまけごころが起きない。

念食（ねんじき）――いつも仏法を念じて生活していると、その念力によって生きてゆくことができる。

解脱食（げだつじき）――悟りのたのしさによって、身心安らかである。

これらは、要するに、こころの食べ物です。食べ物は、単なる餌ではありません。栄養さえ満たされていればそれでよいというものではありません。

こころのこもった食べものをいただくと、それがどんなに粗末であっても、ほんとうにおいしく、ほんとうに栄養ゆたかな食べ物になるということは、日常生活でも、経験することです。

東佐与子氏（日本女子大学教授。日本政府の留学生として、フランス、パリのル・コルドン・ブルウに留学した）に、『愛の料理法』という書物がありますが、東先生は、道元禅師の『典座教訓』を高く評価して、料理法の真髄は、これに尽きるとのべています。

人間の食べ物、食べ方が物質的方面だけにかたよって精神面を忘れてしまうと、心身は完全に育たず、やがて自滅してゆくという意味のことを唱えておられます。

いま、私どもは、このことを真剣に考えてみなければならない段階にたち至っているとおもわれてなりません。

なお、また、仏教では、宗教的生活、精神的生活の段階によって、食べ物が異なると説いて、「四食」を説きます。

四食とは、「不浄依止食」（凡人の食べ物）、「清浄依止食（阿羅漢の食べ物）、「浄不浄依止食」（天人の食べ物）、「能顕依止住食」（仏の食べ物）です。

精神生活、宗教生活の程度のいかんによって、食べ物がちがうというのは、なんとおもしろい発想でしょう。

このこととは直接の関係はありませんが、かつて、私は、大学院で、保坂玉泉博士（駒沢大学総長。法相唯識学の大家）から、「土石を変じて魚米となす」ということをおそわりました。

博士は、小柄で、山羊ひげをたくわえた、なかなかユーモラスなお方でした。まじめな表情で、「法相唯識の仏教を学ぶと、実際、こういうことができるのだ」と申されました。

保坂先生はお出来になったのかも知れませんが、当時の私には、とうてい信じられないことでした。

「だから、唯識は、観念論といわれるんだ」ぐらいの感想しか抱いておりませんでした。

が、このごろは、なんとなく、その意味するところがわかりかけてきたように思われます。

インド留学記

その3

プーナで出会った人たち(1)

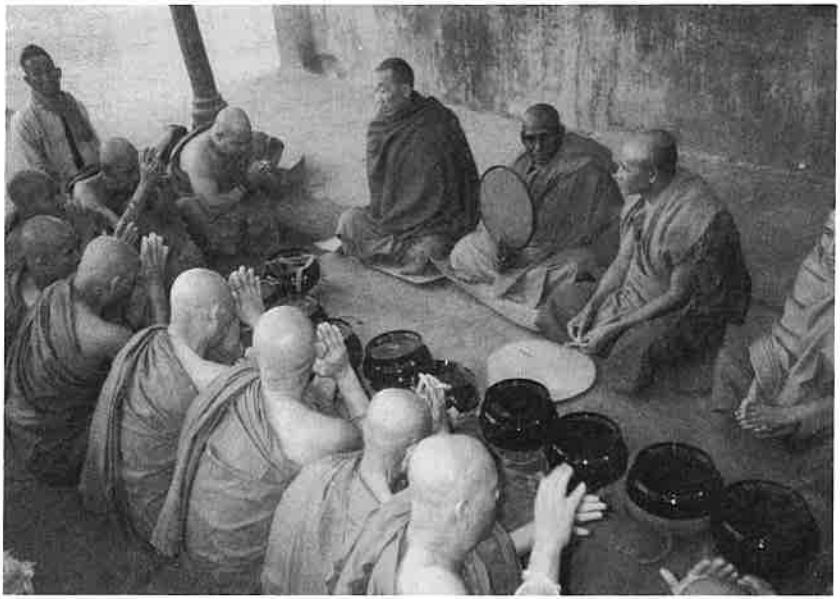
東方学院講師
駒沢大学講師
阿部慈園

一　留学とは？

留学とは何か、ということをあらためて考えてみました。ふつうの辞典では、「留学」とは、「よその国に在留して学問をすること」と定義されています。

わが国では、明治以降、留学といえば、もっぱら欧米に赴き、新しい文物を学びとることでした。しかし、遣隋使や遣唐使のころは、中国へ勉強のために渡ることを、留学と称しました。ただし、呉音で「るがく」と読まれました。多くの留学僧が海を渡りました。

弘法大師空海の詩文集『性霊集』によりますと、留学僧には二種があったことが記録されています。半年から長くて一年中国にとどまる、いわば短期留学の「還学僧」と、平均数年（長い者は二十年も）かの地に学ぶ、長期留学の「留学僧」の二です。もちろん、弘法大師ご自身も留学僧のお一人でした。延暦二三年（八〇四）、三一才で入唐し、恵果阿闍梨から親しく密教を



学び、三年滞在ののち帰朝しました。

当時の渡航は困難をきわめ、四艘のうち一艘しか戻ることができなかったといわれます。新羅などの朝鮮半島からも中国へ留学僧が渡りました。東方学院で一緒に『華厳経』を読んでいる、韓国からの留学僧の陳本覚さんに、

「お国の場合はどうでしたか？」

とたずねたところ、

「中国へは内海を渡ることになりますから、四つのうち三つは戻れたでしょう」

とこたえてくれました。

今日、中国やインドへは飛行機でひとっとびです。それも安全に。わたくしは、昭和四九年の初渡印から数えて、八往復しました。インドにおける全滞在期間は五年になろうかと思いますが、そのうち一番印象深いのは、やはり第一回目の渡印で、場所は留学地プーナといえましょう。プーナでさまざまな人に出会いました。

インド人はもとより、欧米や日本などからの留学生・研究者などです。

前回は、恩師バパット先生のことを書きました。今号は、わが国の一橋大学より来られていた故深沢宏先生のことを述べたいと思います。といいますのは、先生の一言がわたくしをしてあることを決意せしめたからです。

二　深沢宏先生のこと

深沢先生は、昭和六年山形県に生まれました。一橋大学経済学部、同大学院を修了されたのち、同三一年インドのラクナウ大学に留学されました。三年ののち学位(Ph D)を受けられました。インド社会経済史に関する論文だったことを聞いています。それがのちに、『インド社会経済史研究』(同四七年、東洋経済新報社より刊行)の大著となりました。

先生のころは、留学生は主に船で渡印したと聞きます。横浜から、ホンコン・シンガポールを経由して、マドラスに至り、カルカッタからインド亜大陸に上陸し、汽車でラクナウへ。そして、カルカッタから帰国の船に乗ったとき、「三年間、自分はインドの夢を見ていたのではないのか」と思われたほど、インド留学生活は強烈であったと筆者に語ってくれました。

同四一年より約一年間、イギリスのロンドン大学に留学されたのち、四九年イラン経由でインド・プーナのゴーカレー社会経済学研究所に止住されていました。同年十一月プーナ入りしたわたくしは、一ヶ月前に到着されていた北海道武蔵女子短大の八力広喜先生(ともにバンダールカル研究所のゲスト・ハウスに住む)とつれだって、深沢先生の宿舎をよくたずねました。

先生の机の上には愛息の写真がいつも飾られてありました。それを見やると、

「わたしは、晩婚でしてね」とてれくさそうにつぶやかれました。

日本からのソーメンを手づからごちそうしてくれました。大きなパパイヤをかかえて、わたくしの部屋をたずねてもくれました。

プーナへ来て一ヶ月ほどたったころ、ひとりで先生の部屋をたずねたことがありました。インドの夕日を浴びながら、先生はいいました。

「阿部さん、これからどうするつもりです」

「Ph Dコースに入れて頂きましたが、特に論文をまとめなくとも、二年ほどしたら日本に帰るつもりです」

「そんなことではいけませんよ。せっかくPh Dコースに入れて頂いたんだから、論文を提出して帰らなくては、インドの大学に対して失礼というものですよ」

先生のこの一言は、わたしの心を激しく動かしました。絶体論文をまとめて日本に帰るんだ、という決意をおこさせました。そう励ましてくださった先生は、惜むらくは一昨年(六一年)八月二六日病気で他界されました。

(つづく)

インド留学記

その3

日本人のインド理解の盲点

東方研究会
研究嘱託
保坂俊司

寮の朝の生活

私のいたジュビリーホールは、インド人学生の憧れの寮である、と後に友人から聞いた。デリー大学は大学院大学なので、数十のカレッジからなりたっている。生徒数は十二万とかいっていたが、インド全国から集まる秀才にとっては、大学に入るより遙かにこの寮に入ることは難しい。聞くところに依れば千倍近い競争率であるとか。なぜなら、デリー大学は日本の東大のようなもので、インドの文科系の偉い役人や学者外交官は殆ど、このデリー大学出身だという。そして、この寮から、何故かインドの学生に人気があるI.A.S.（インドの国家公務員上級試験）の定員の一割近くが合格する。そんな大それた所に入ってしまった私は、大いに驚いた。回りの者の殆どが、将来は大統領だとかアフリカ大使とかをめざす、青雲の志を持った者ばかりであった。二〇〇室ほどの寮に三五〇人程が寝起

きしており、すべて将来のインドを背負って立とうという意気込みに溢れる学生ばかりであった。

ところが如何であろう。私はなりもの入りで入ってみたが彼ら程の志は持ち合わせていなかった。加えて、インド学生にとっては、宗教な

んぞやって何が面白いのかと不思議がられるしまつである。ここでも日本同様哲学とか宗教をやろうなんて学生は、変わり種なのである。

しかし、友達はすぐにできた。インド人は一般的に、はにかみ屋が多くて中々親しくはなれないのだが、やはり同じ釜の飯ならぬカレーを食べて、四六時中顔を付き合わせていると、自然に友情も湧いてこようというものだ。

わたしが最初に友達になったのは、日本からの習慣で早起きのためまだ開かぬ食堂の扉の前で、度々顔を合わせた東インド出身サフー（日本風に云えば富夫くんである）君であった。彼は口髭を蓄えた小柄な目の大きい青年でその後随分世話になった、最高の友達の一人である。

彼はバラモン出身ではなかったが、宗教色に溢れた中々古風な生活をしていた。そのくせ学んでいる分野はバイオテクノロジーなどという最先端のものである。

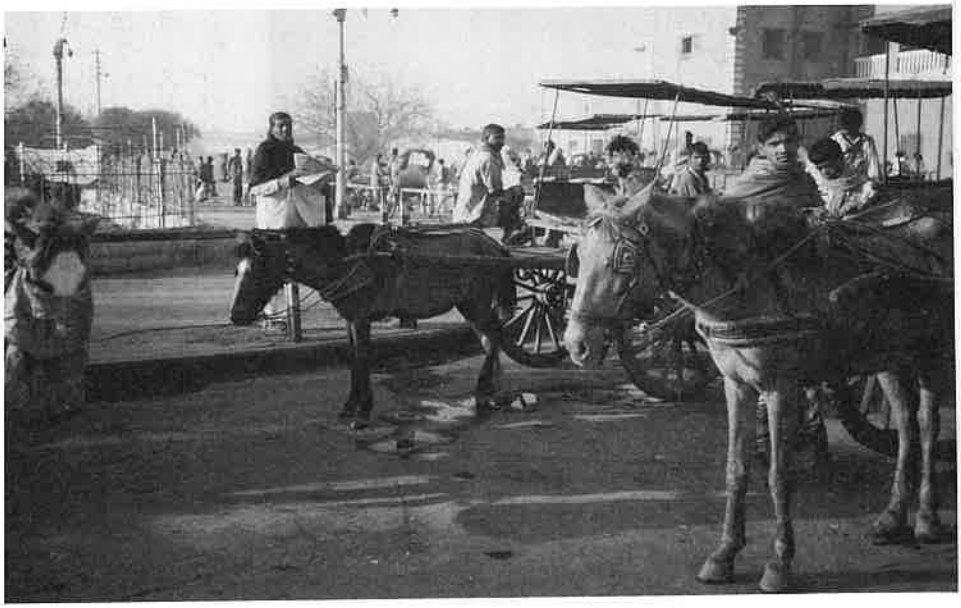
かれの生活で、感心したことの一つに毎朝冷水を浴びて後、顔や歯は勿論だが舌を丁寧に洗うことである。Uの字型に曲がったヘラ状のもので丁寧というよりしゃにむに擦るのである。「なんでそんなとこまであらうのか」と聞いたところ（身体の隅々まで洗うのが、朝の仕事であるから当然さ、おまえもしてみろよ、気もち

いいよ」とのことであった。そして「インド人は甘いものを沢山食べるけど比較的虫歯が少ないのは、この舌を清潔にしているからなんだよ」と言っていた。確かに言われてみるとそのとうりである、ということで私も継ぐ日から一緒に、洗うことにした。やってみると確かに気持ちもよく、朝起きた時の口の中の不快感が無くなり、さすがインドの文化は凄いと感心させられた、

もっとも、この舌洗い、インドにおいてもあまり一般的ではないようだ。しかし、これのおかげで今まで遠巻きに眺めていた連中とも仲よくなれた。

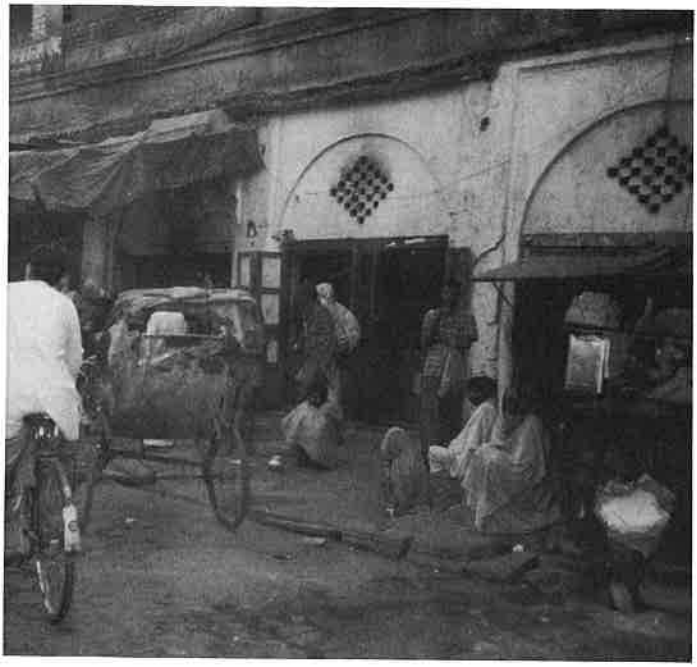
朝食後の仕事

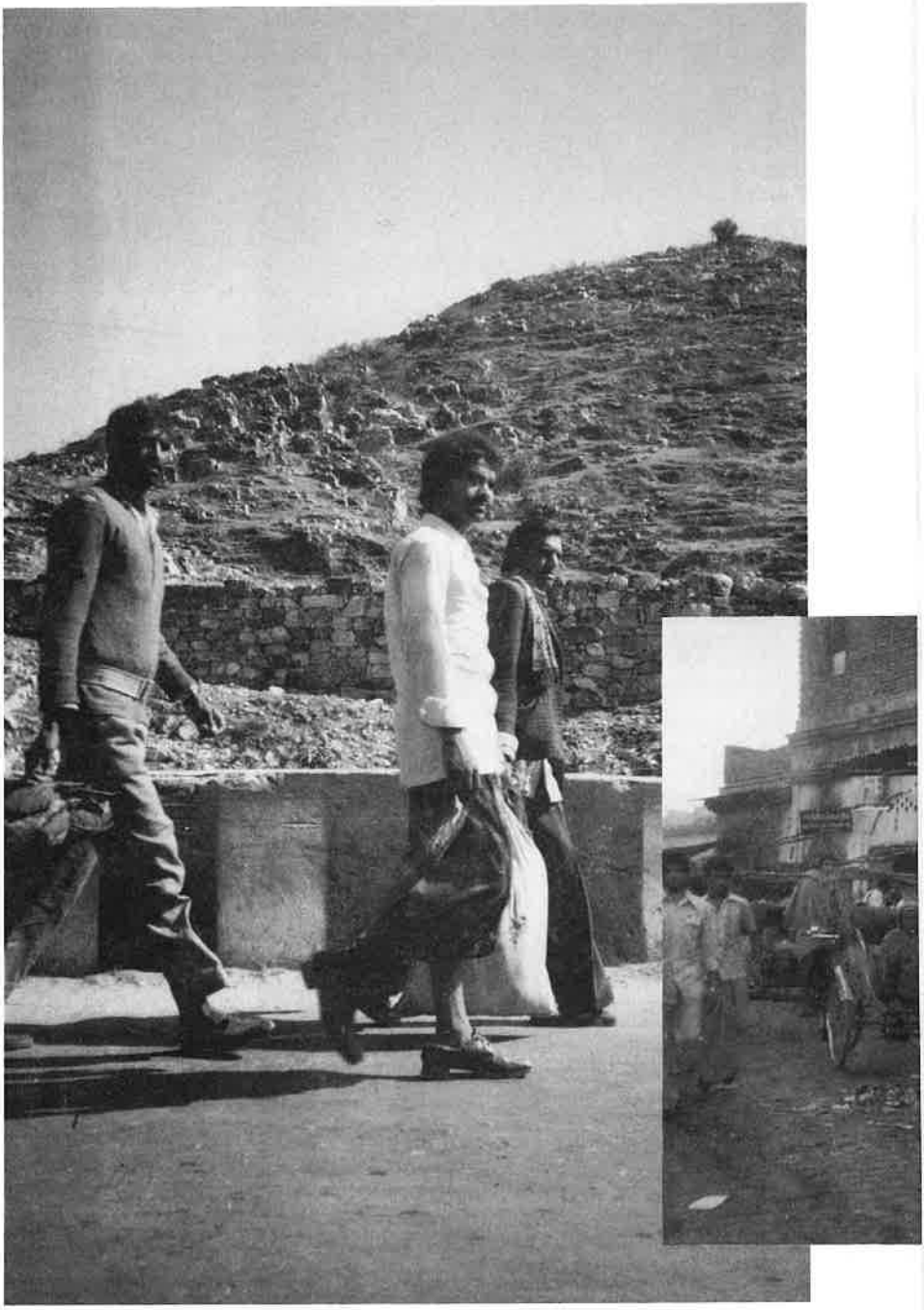
食事が終わると新聞を読む。大体のインド学生にとって、新聞は単なる情報源なのではない。新聞の隅から隅まで丹念に読み英語力に磨きを

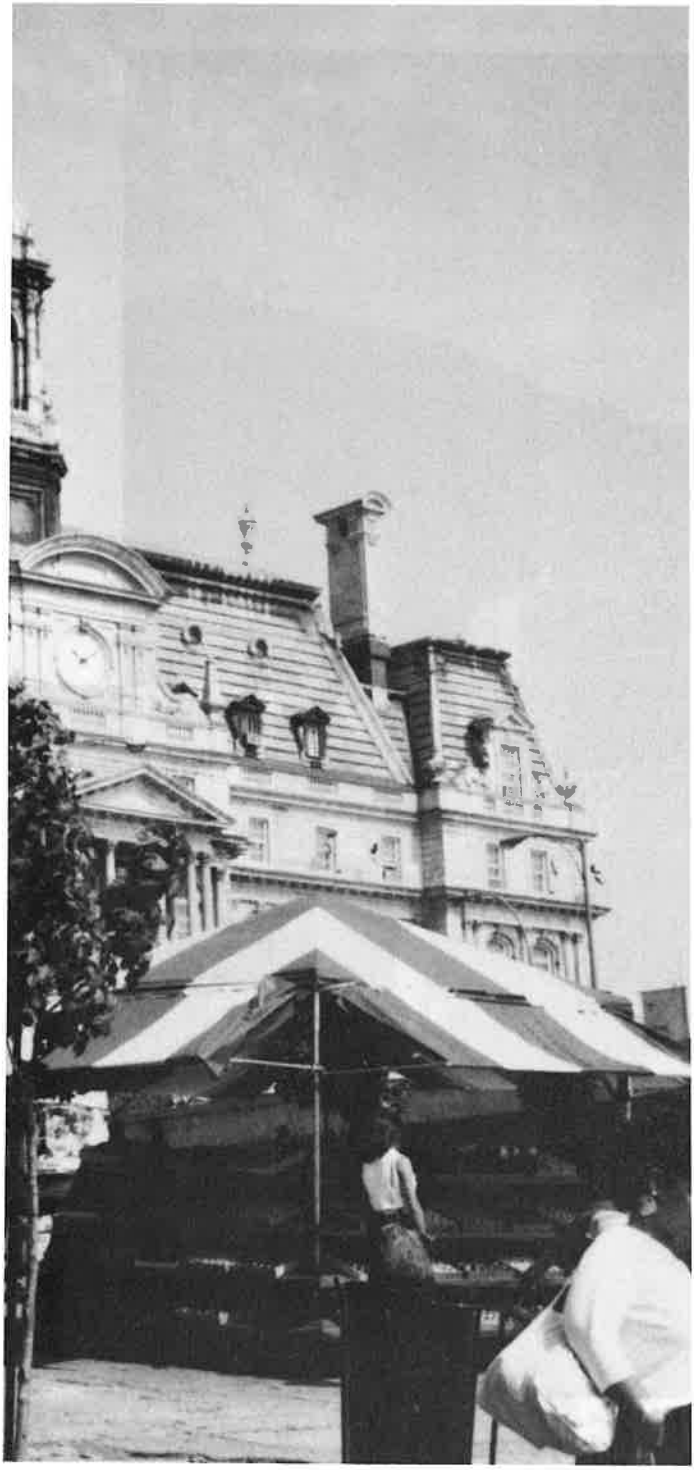


かけたり、公務員試験の勉強の準備をしたりで二～三時間じっくり読む。考えて見れば、新聞をじっくり読めばちょっとした本一冊分に当たる分量なのだから、実に合理的ともいえる。もっとも、殆どの人間が同じ情報源なので話していてもすぐにさきが解ってしまうことも多かったが。そして、この新聞は、くず屋さんに引き取られ、そこでお菓子や果物の袋になる。実に無駄のない新聞利用法である。

九時頃になると、ドウビーといわれる洗濯屋が洗い物を取りにくる。これが、実に親切心旺盛のおじさんで着ているものまで持っていってしまう。お陰でいつも糊のきいた。目の覚めるように白いインド服でいつも快適だった。加えて大変安くて申し訳ないような気もした。もっとも時々ひとの下着まで混ざっていたりで、大雑把ではあった。洗濯も居ながらにして出来るわけであるが、さらに掃除も寮のおじさんたちが朝やってくれる。したがって何にもしなくともいいのである。ただ、私は勉強だけしていればよい。極楽だと始めは嬉しかったが、やがてカースト制度の悲惨さが見え隠れしだして悲しくなってきた。



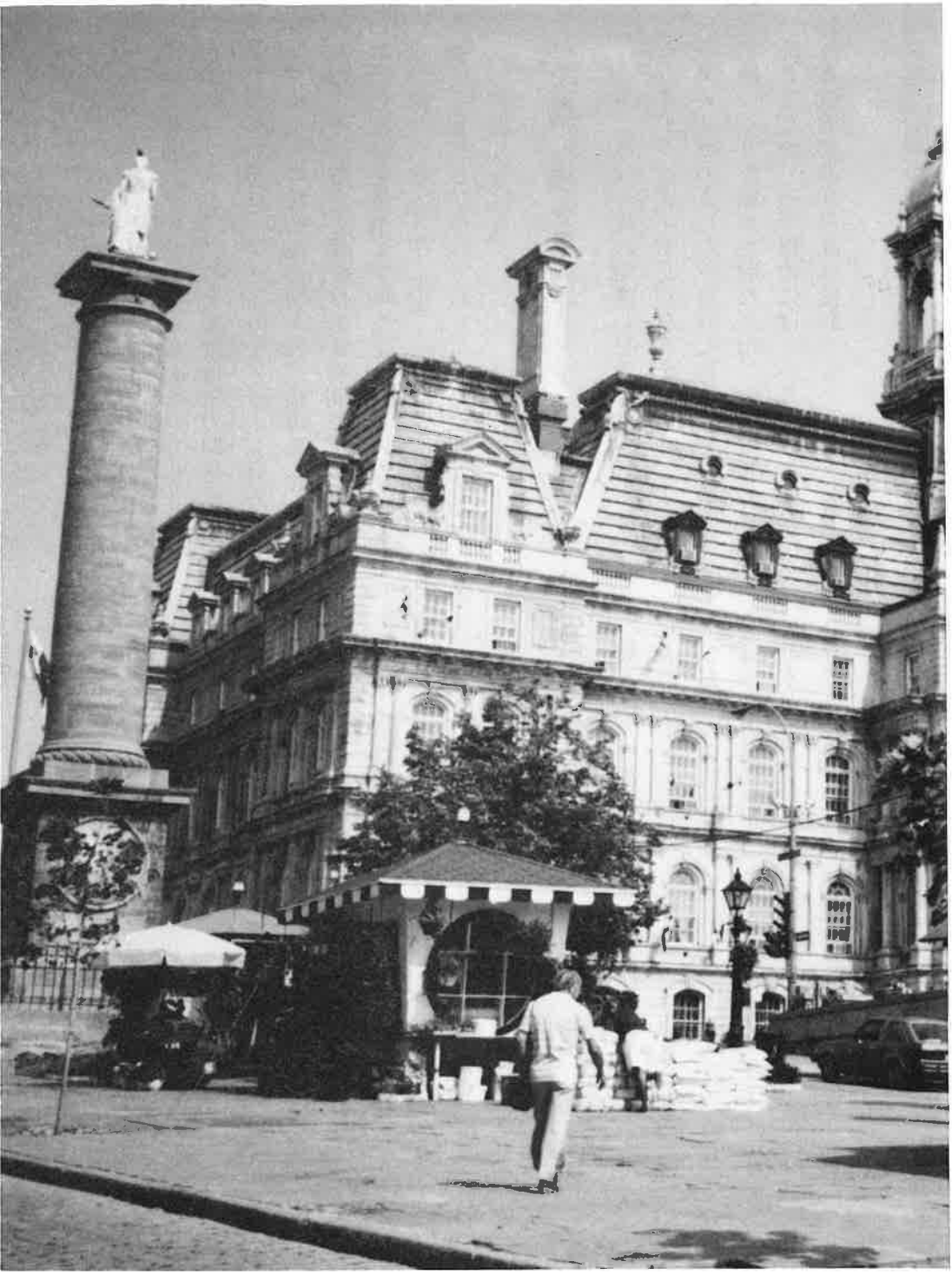




アメリカ留学体験記

視野を広める海外生活

島崎　義孝



今から十年ほど前、私がまだ学生だったころ、当時、花園大学の学長をしておられた山田無文老師がニューヨークの大菩薩禅堂の開単式に臨まれたついでに、アメリカやメキシコ各地の仏教グループの接心にも招かれ、指導をしてこられた。そのときの模様がある新聞に掲載され私はその記事を非常に興味をもって読んだ。「あちらの禅が本物」とか「悩みのない日本人の修行」という見出しがついており、内心で反発もし、また刺激もうけた。

次第に根を下ろす

そのころは一時の雨後の筍のごときビート・ゼンやドラッグ・ゼンがなりをひそめ、ようやくアメリカの人たちが自分たちの手で組織的な集団づくりを始めた頃だった。山田老師の目を通じてだが、その報告には、いきいきとしたかれらの活動ぶりが直に伝わってくるようなリアリティがあった。私がアメリカの仏教事情に関心をもち、今回の留学を志した一因がこのあたりにあることはまちがいない。

そして、実際にアメリカに足を運んで、そこの仏教グループの人たちと接してみると、以前わたしが日本で聞いていた耳目をそば立たせるような人に会ったり、特殊なやり方を目のあたりにすることはまったくなかった。ごくふつうに社会生活を営んでいる人たちが任意に接心に参加したり、小さなグループの定期的な集まりに通っているというぐあいで、淡々と坐禅が続けられていた。ひとくちで言えば釈尊の教えが徐々にではあるが試行錯誤を繰り返しながらも、次第に根をおろしつつあるという印象をもった。

ある人に言わせれば、D・T・スズキの書物は今や古典に属するという。ネイティブ・スピーカーによって米語で著された仏教語もこんにちでは夥しい数にのぼる。もちろんこのように

多くの書物が出版される背景には多くの読者の需要があるのであって、特定の人達を除けば教養書の枠を出るわけではないが、日本で「禅」に興味をもつ人たちが知っている程度の事柄はかれらもすでに心得ている。

日本の型は破るべき

永年アメリカで仏教の指導に携わってこられた某師家が、どういうわけで坐禅をするのか門下のアメリカ人に尋ねたところ、しばらく考えたあげく、よくわからないがとにかく坐る必要を感じるから坐るんだと答えたそうである。これはすごく素直なこたえ方だと思うし、正しい受けとり方だといえる。決して軽々しい態度ではない。

ただ、いまだに中国・日本の「禅」の形態を至上のものと考えている人も少なからずいるらしい。ごく一般的な日本人の感覚からすれば禅宗といえば、常人では耐えられそうにない厳しい修行が課され非常に高踏的な達人宗教のように考えられている。このことは一面では事実であろうが、他面では多くの人々を誤まらせてきたことも否めない。実際にこの地でアメリカ人の相手をしている人の口から「アメリカ人に禅はわからない」といった発言が一再ならずされてきたが、私は一種の同感を覚えながらも、それは日本の禅教の型に拘泥しすぎではないかと思う。

鈴木大拙博士が「禅と日本文化」で紹介したような仏教の形態をアメリカという風土にそのまま移植することは不可能だし、それは木に竹をつぐようなもので実情にそぐわない。イザヤ・ベンダサン氏が日本人をキリスト教徒も仏教徒も、あるいはなんの宗教にもかかわっていない人も含めて日本教徒と呼んでいるように、アメリカにもそれなりにかれらが底辺で依拠し

ている社会・文化の枠組があるはずだ。

もっとも、アメリカの人々のなかにも、日本の禅仏教やそれによってもたらされた文化現象の絶対的な礼讃者が数多くいるらしい。禅堂で障子や畳が坐禅をする環境をつくり出すのに適当だとして取り入れるのは十分に利用のあることだとしても、高価な香をくゆらせながら、どう見ても禅マインドの発露とは見えない墨絵や書を描いて悦に入っている一部の人々を見ていると、鼻もちならぬスノッブを覚えてしまう。これなどは日本型禅仏教の皮相な直輸入なのだが、かれらの趣向もさることながら、先生格にあたるわが国の側からの伝達の仕方にも大きな問題があったといえる。

不用意に「禅」ということばを頻繁に用いることによって、無意識のうちにそういったものを実体化してこなかっただろうか。ふつうに坐禅に親しんでいる人でも、時としてゼンということばを好んで使いたがる傾向があるが、われわれも注意しなければならぬ問題だと思う。

米独自の形態を期待

仏教、すなわち釈尊の教えというものをつきつめれば、普遍的に人間がかえている生老病死というサイクルのなかでの現実の〝生〟の意味に対する全人的な問いに対するこたえであり、また坐禅はそれを自己に血肉化して体得・理解する具体的な方法である。私はこの点だけをしっかり踏まえておけばいいと考えている。後はそれぞれの環境で変化していくとしてもしかたがない。中国で生まれた仏教の新しい方法が日本で新たな展開をとげたように、アメリカではまた独自の形態を生む。一方、伝統は新しい血液を受けることによって活性化するのだと信じたい。

私はアメリカでの生活を通じて多くの真摯な

友人を得たと思う。かれらが私から学ぶものがもしあるとすれば何かを学んだであろうが、私は私でかれらのひたむきな態度に大いに啓発されてきたことは表白しておきたい。私の留学体験はまだ一年程でしかないが、実際にアメリカ人と語り、あるいは共に坐禅を組むことにより、大きな刺激を受けてきた。

特に、海外生活は視野を大きく広めてくれる点で意義がある。やはり今後の宗教者は、仏教徒だけでなくあらゆる宗教の人々が、自分たちの教派や自分たちの世界観だけにとじこもってはいけないと思う。また、世界を舞台にして活動していくべきであると痛感している。

（善光寺海外留学僧、アメリカ派遣）

善光寺だより

開山忌と初不動法要

小春日和の一月二十八日、善光寺の関係者が集って、開山忌と初不動の法要が、厳かに営まれました。

開山忌の導師は当山住職が勤め、差定（法要の次第）を、佐藤俊明老師に、わかりやすく説明していただきながら、無事終了しました。

続いての初不動法要は、替わって佐藤俊明老師が導師を勤められ、全員焼香ののち、なごやかに会食となりました。

ご参列くださった大仏師・錦戸新観先生が、奇しくもこの日八十歳の誕生日を迎えられ、ささやかな祝宴も盛り込まれました。

錦戸先生の、益々のご活躍をお祈り申し上げます。

ご寄付御礼

●海外留学僧派遣育英会

黒田　俊雄殿　五百万円
越石　周平殿　二十万円
瀬之間政勝殿　十万円
中村　正信殿　十万円
城西ライオンズクラブ殿　五万円
石川　征殿　五万円
瀧澤　武雄殿　一万円
木原木工所殿　一万円

●『成寿』賛助

大道晃仙殿　二万円

●読者からのお便り

先日はご本お送り下さいまして誠にありがとうございました。益々御発展をお祝い申し上げます。私は方丈様に頂戴しましたお不動様(陶器)をずっと戴いた時からおまつりして居ます。毎朝暖いごはんを差し上げ28日はかかさずお赤飯をたいて日々おまもりにして居ります。ほんとうに霊験あらたかなのです。今は困ったことがある度に紙に書いてお不動様におあずけして不動真言を何回ととなえてお願いして困難をのり切らせて戴いて居ります。

又今回は鎌田茂雄先生のお写真と文が出て居りましてくりかえしくりかえし拝読させて戴きました。

只今ＮＨＫの「こころをよむ」で浄土三部経の初めから録音しました時間を見ては、きいて居ります。

只今のが丁度鎌田先生の華厳経でして今迄何人かの先生や方丈様のをお聴きしましたが鎌田先生が一番心にしみ通るお講義でございます。

時間の空いた時は何回でもくりかえりくりかえしお聴きして居ります。

この前頂戴したご本では中村元先生のことが出て居りましたが佛教大事典ではいつも中村先生のおせわになって居ります。

私もぜひ近々善光寺様にお詣りさせて戴きたいと考えて居ります。

仕事がふえて外出もなかなかままになりません。

ありがとうございました。厚く厚く御礼を申し上げます。

笹野浪子

この度「成寿」のご恵送に預かりご好意のほど恐縮に存じます

誌面からは　まず東奔西走のご活躍のほどが窺われ祝着の至りです

また留学僧派遣の成果が　着々とその実を結びつつあることが誌面に溢れております

さらに感銘深い文章　慈味豊かなさしえや写真など　まことに充実した内容を伝えてくれます

俗塵を洗われる思いで心が豊かになります

厚く御礼を申し上げます

藤沢市　廣島一雄

先日は御帰国早々に御丁寧にお土産を御送り下さり本日は又御多忙にも不拘記念写真を誠に有難う存じました厚く御礼申し上げます

御老師御夫妻外遊御出発の朝例年に無く早い雪で歌一首詠ませて頂きましたが、なんとなく気恥かしく本日迄手元に置いてしまいました同封致しますので御笑覧下さい。

大徳の慈悲の心以て異国の人々へ御教導の深からん事を

旅立つの晨ふりつむ白がねの
　真白き心　よろづの人に

船橋市　阿々津経之

本日はお誕生日誠にお芽出度う御座居ます。成年重ねて来らず時は無情の暴力に似て過ぎに過ぐるもの帆。かけたる舟人の齢、春夏秋冬と云われて居りますが一日再び晨なり難しの言葉をつくづく重感する時今です。小生時の貯蓄は出来ずとも積善の人となるべく菩提の種子から授った善苗は一雅万倍の功徳をもたらすものと努力情進させて頂いて居ります。時節柄くれぐれも御自愛の程心より祈念申し上げます

合掌　東京　津田正裕

この度は冬号を御恵送下さいましてありがとうございました。五月に拝登させて頂いた時西隆寺住職の御法話を有難く拝聴し、メモしておいたノートをたまに見ては思い出しています。穏やかで暖かみのある細い目からこぼれおちるようなまなざしは、忘れることが出来ません。冬号にお顔の写真が載っており改めて拝読させて頂いております。道路整備が良くなった昨今横浜も近くなりましたが、まだまだ家庭を持って居る者としては、お参り出来ず残念でございますがこのような処までの心くばりに厚く御礼申し上げる次第でございます。

大月市　高山さつき

拝啓　暖冬の東北は今日も雨にて、寒行に出かけむとする志気を薄めてくれます。

「成寿」冬季号御恵送下さり厚く御礼申し上げます。遠藤太禅老師の慈味深重な御法益に、自らの懈怠心を改めて恥じ入りました。

寒行や笠をすかして母の星
ちっぽけな悩みなど吹き飛ばして、本当の精進をせねば！と叱正をして頂きました。

また島崎師のレポートには、懐しい仲間の顔が浮かび細部まで腹蔵のない意見だと存じました。益々の御盛隆を祈念申し上げます。

合掌
秋田県　渡邊紫山

成寿八号有難く拝受
23頁。漢訳経典に吉拝草とありますが、これは原語クシャ kusa、稲によく似ています。六月頃には白い花が咲いてくれます。日本でちがやと呼びます。編んで雨具に用います。東アジアならどこにもあるようです。結如趺坐は釈尊以前からある坐法で、釈尊の父も樹下で坐しています

小生昨年十二月以来脳硬塞を患い本格的な研究生活に戻れません。先月は会津若松へゆき、新製の日新館や、会津城を見て感心しました。

ここの観音様は珍しく美しい大佛です。ボロンナワール（スリランカ）より寄進の寝釈迦は珍しい

新潟県　坂内龍雄

今回成寿（冬季号）私にとりましては本当に感謝して読ませて戴きました「ふるさとへ還るおみやげは……私の胸にぐっとひきつけられただただ涙が出てとまりませんでした。日々めざましい御活やく本当にかげながら嬉しく存じております……。

寒さ厳しき折柄御自愛の程をお祈り申し上げます。奥様にもよろしくお伝え下さいませ。

横須賀　川合佳代子

拝復

本日は成寿第八号拝受いたしました。いつもながらの広範囲の内容におどろいております。小生も先般、ロス禅宗寺六十五周年記念行事に出席してまいりました折、前角老師ともお目にかかってまいりました。

貴山、成寿のますますの御発展を念じ上げます

合掌

松本　小笠原隆元

昨年は祈禱会に参拝させて頂き誠に有難とう御座居ました。又その上は結構なだるまさんとおべんとうまで付けて頂き誠に重々恐縮の到りです。

佐藤先生の法話も拝聴させて頂き腹八分目のすべての生活と腹立ちを断つお話しでした。畳の目一つづつでも実行させて頂きたいと心に誓わせて頂く次第です。有難う。御座居ました。中外日報の記事興味深く拝読させて頂き、お徳の大変お有りになるお方だなあと痛感致しました、又謙虚な方だと感じました。先生のお父様は家の祖父、祖母も、戒名をつけて頂きました。そのお父様のお力で先生はお徳がお有りになられるのだと感じました。そんな結構な先生に巡り会う事が出来ました事感謝で御座居ます

横浜　滝沢孝子

此度は、私の大教師補任と『煩悩に遊ぶ』の拙著発刊及び住職五十年勤続の表彰に際しまして、内海倫先生はじめ檀信徒役員の方々が発起人となって、盛大なる祝賀会を催して頂きましたところ、御尊台様には大変ご多忙の中を且つ雨天にもかかわらず御臨席を頂きその上御丁重なる御祝いの詞と共に過分な御祝賀金を賜りまして有難く厚く御礼申し上げます。パリに於ける大獅子吼の模様中外日報で拝見致しました。国際舞台に於ける大活躍本当に御苦労様です。仏教徒の誇りであると共に大変勉強させて頂きました。今後の更な

る御活躍と共に法身愈々御自愛を念じ上げます。

耕雲寺住職　芦辺鎌禅九拝

成寿冬季号を御恵送下され有難く拝受拝読させて頂きました　御礼申し上ます　留学僧派遣の大事業洵に敬服いたして居ります　太祖禅師御教訓　檀那を敬ふこと仏のごとくすべし云々　今日こそ寺院に住する者等脚下再点検の時と思惟いたします。老来そろそろどんなおみやげを買ふべきか！さてよいおみやげとは何か愚者の苦慮するところです

寒中何卒御自愛之程　御祈、申し上ます

新潟常福寺東堂　牧寛禅

〝原稿・おたよりを〟

「成寿」誌では〝読者からのお便り〟の頁を設け、皆様の投稿をお待ち申し上げております。何でも結構でございます。どうぞ下記までお送り下さい。

送り先
横浜市港南区日野町1604
成寿山善光寺　成寿編集室

海外留学僧募集について

目　的　大学卒業相当以上の学力を有し、仏教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして心身堅固なものを海外に派遣し、仏教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る優秀な人材を育成することを目的とする。

派遣先　アメリカ――ロスアンゼルス禅センター、タイ――ワット・パクナム

派遣期間　一年間とするも場合により延長するも可

給　費　派遣先までの往復旅費及び滞在に要する必要経費を支給する

募集人員　2～3名

提出書類　(1)　保証人と連署した願書　(4)　卒業証明書
(2)　卒業証明書（写し）　(5)　推薦書
(3)　履歴書　(6)　論文

提出レポート
一、アメリカ希望の場合
禅の国際化と私の役割　(2)　二一世紀の仏教と私の役割
二、タイ希望の場合
(1)タイの仏教に学びたいこと　(2)　未来社会の仏教と私の役割
希望国の中からいずれか一題を選ぶこと、枚数はいずれも四〇〇字詰原稿用紙五～一〇枚

善光寺海外留学僧派遣育英会事務局

Preface

The Zenkoji Scholarship Society for Priestly Study Abroad has full four years of history since its foundation.

In the second issue of this magazine, I stated:

> "On January 15, we held a meeting of the preparatory committee for the foundation of "The Zenkoji Scholarship Society for Priestly Study Abroad", and decided to send priests to study abroad in the spring of the following year. The future development of the religious world depends solely on the cultivaton of men of ability and character. May the operations of the Scholarship Society Contribute to the world peace and the progress of mankind."

Four years have passed since then. Under the protection of Buddha, the Society operations have been in favorable progress, successfully sending a total of 13 priests abroad for study in three stages during the past four years, the first stae commencing in 1985. Happily, this project was given an opportunity to make an apperance on an international stage. On the 8th last December, the auspicious day when Buddha attained religious enlightenment, and at the Franco-Japanese seminar held at College de France, Paris, I delivered a passionate speech for one hour and a half under the little, "In Search of A New Route for

Religious Education — The Wake of 15 Years of The Missions". Nearly whole of the text of the speech was published on the newspaper "Chugai Nippo" and, later, an article titled "Instructions of An Embodiment of The Ideal" was contributed by Professor Anzai of Jochi University to appear on the same newspaper. This fact, among others, indicates how the management of this temple is highly appreciated at home and abroad. And I am keenly aware that it entirely owes to the benevolent sustainment of every one of the supporters of the temple. At the seminar, I said to the audience, "At the threshould of this project, I, from the bottom of my heart, beseeched the supporters of the temple, 'Out of every one meal you take, please save one mouthful of rice for the propagation of Buddhism'. I firmly believe that 'where the wheel of Buddhism runs, the wheel of foods runs'. If it is the Buddha's protection, the supporters of the temple then are really Buddhas themselves. Rev. Hozan once told, 'Deeply respect your supporters as if they were Buddha'. This Rev. Hozan's precept has been the spiritual backbone of all my buddhist practices that have developed Zenkoji as it is and that have made the big project of sending priests to study abroad viable." No sooner than I had uttered the last word, a storm of applause appreciated me.

編集後記

▼フランス・パリ第一大学における第二回日仏セミナーでの、当山住職の発表は、お蔭さまで、内外から高い評価を得ることができました。これは、檀徒の皆さまとの二人三脚の結果にほかなりません。フランスで発表した内容を一挙に掲載いたしましたのは、檀徒の皆さまの協力なくしては何ひとつ可能ではなかった種々の事業であること、檀徒の皆さまへの限りない感謝。それらを一貫して語り続けた当山住職を、更に身近に理解していただきたく、特集といたしました。

▼駒沢大学教授の奈良康明先生は、同セミナーにおいて「覚霊を資助して仏果を生ぜんことを」というテーマで英語で発表されました。『成寿』のために特別に寄稿くださり、感謝にたえません。

▼来る四月二日、当山において、タイ上座部仏教法式による得度式が行われます。留学僧を受け入れていてくださるご縁もあり、タイ国、ワット　パクナム住職のプラ　ダンマテーララージャマハームニ師が戒師として来日の予定です。タイ国外での得度式というのは初めてとあって、内外から関心が寄せられておりますが、得度を受ける四人の子息たちは、パーリー語の長い経典を暗誦するのに余念がありません。この得度式の模様は、次回に特集を組んでお伝えする予定です。

▼二月三日、恒例の節分会が厳修されました。立春とはいえ、逆に冬が戻ったような寒さの中での豆まきは、お集まりの方々にはさぞかしお寒かったことと拝察いたします。

▼春のお彼岸が近づいてまいりました。寒さもここまで、の感がありました。布施（ふせ）・持戒（じかい）・忍辱（にんにく）・精進（しょうじん）・禅定（ぜんじょう）・智恵（ちえ）という六波羅蜜は、私たちの日々の暮らしの中で行われてはじめて意味のあることと考えれば、そのひとつでも実行する心構えで、毎日を過ごしたいものです。　（小熊）

成寿　第八号
昭和六三年三月一日発行
発行所　成寿山善光寺
横浜市港南区日野町一六〇四
電話　〇四五（八四五）一三七一
印刷所　神奈川新聞社出版局

越路かんのん

風が吹くとその声のかなしさに
雨が降ると一緒に泣けて
独り山路を越え札処へ参るのです
歩きつかれたら
樹の下で休み
月が出たら
光りの中で眠ります
しばし
人の世を離れ
ひたすらに
観音を求む
叱られても
めぐりあいたい
はるかなる大菩薩よ

横浜善光寺